

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十年十一月二十五日 印刷
昭和五十年十二月一日発行 (毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷五八三号



日川協加盟

No. 583

50年度秀句抄

十二月号

姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

早川繊維工業株式会社
大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ!

豚 焼 焼 餃 子
又 焼 饅 頭

豚まんの王様、やき豚入り



大 阪・なんば



TEL (641) 0551-2



<出張店> なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
京阪デパート/堂島地下センター/中之島サン・ストア/なんば新川店/奈良近鉄百貨店

身 辺 忙

11月3日、東京の川柳人協会に招かれて、昭和50年度文化祭川柳大会、並に荻野義博氏の川柳文化賞贈呈が行われる式典に出席した。会場の印刷会館の講堂が溢れるような大盛況であり、又よその大会では余り見られない優勝旗授与などあって、私としては珍らしい風景であった。その上、この川柳人協会独自の句会とでも言うか、如何にもおおらかな句風を、選をしながら肌感じて、極めて楽しい半日であった。東京と関西とが、こんな

身近くに風光をあたため合う事は、日川協が発足した今日一層有意義なことだとしみじみ考えさせられた。東京といえば、先月号の本欄で「どじよう」の事を書いたが、あれは、駒形のどせう屋で、どじようを食べたことすべきであった。日川協通信部から注意されたので、私の浅学を訂正しておく。たとえば、私の生々庵は、青々庵ではないのと同じミスである。固有名詞のむずかしさや、歴史の流れを勉強さして貰うた。

お人よしない袖はふれずしなびゆき

海女にしてふと畳の香恋しうて

秋空のベンチに胃散ほしい人

不義理重ねたまま動かない水車小屋

義兄逝く

耐えぬいてやがてひっそり去りたま

中 島 生 々 庵

川 柳 塔 十 二 月 号

川柳塔十二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

座右の句

踏まれても怒らぬ道をわれも踏み

(無聖)

私の句

嬉しさはひとさまの句が抜けたこと

河原みのる

身辺忙

中島生々庵 (1)

初心忘れず

川村好郎 (2)

誹風柳多留廿五篇研究

(八)

清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫

川柳塔 (同人作品)

西尾 栞選 (4)

水煙抄

菊沢小松園選 (36)

麻生路郎物語

(12)

東野大八 (23)

秀句鑑賞

(同人吟)

正本水客 (35)

近作

(水煙抄)

岡村久志良 (47)

百人一首と川柳 (18)

富士野鞍馬 (44)

愛染帖

橘高薫風選 (48)

初心忘れず

川村好郎

十月のはじめ、大萬川柳「ほとぼり」の選が終ったので毎月の如く、天笑さん、一二三さんに私宅に来てもらい、入選句と投句整理番号とを照合調べをした。その結果、一二三さんが天位、佳句一句、平抜き二句、計七点半、遂にベストテン第一位に躍り出たのです。今年は彼大萬川柳に対し意欲を燃し、漸次上位に躍進してきたが、まさか強豪たちを抜いて第一位を後半になって占めるとは思っず、本人もその意外の好成績に驚き、そのうれしさにジットしておれないのか、すぐ自宅の奥さんへ電話をしたのです。この吉報をまず愛妻に知らせたかった。二度も電話をしたが話し中、やむを得ずいそいそと天笑さんと帰っていったのです。私はすぐ入選句を川柳塔社へ送るべく原稿紙に筆を執った。ところが二三人入選句の句箋が無い。若しやと一二三さん宅へ電話をしたら想像通り彼余りのうれしさにあわてて、すっかり持ち帰っていたのです。そして聞けば今天笑さんも居て、奥さんと三人で樽酒をあげ、祝杯を酌み

50年度秀句抄

選者有資格論

善意

一分間の柳論

難解句について

雅号ぶっちゃけばなし

録音テープ

初歩教室

大萬川柳「靴ベラ」

柳界展望

本社十一月句会

各地柳壇（佳句地10選）

一路集

「納め」

「プリンス」

編集後記

大 路 美 幸

藤 村 青 一

大 矢 十 郎

森 田 布 堂

落 合 思 月

八 木 摩 天 郎

本 田 恵 二 朗

川 村 好 郎 選

（ 庸 佑 ・ 整 理 ）

森 井 蒼 居

高 橋 千 万 子 選

高 橋 鬼 焼 選

吉 岡 通 児 選

（ 一 三 夫 ・ 葉 子 ）

交わしているとの事、賑やかな笑い声が受話器に伝ってくる。

一三さんは決して初心者ではない。川柳

をはじめて七年になる。しかも地道に營々と

して川柳に取組み、生き甲斐を求めている人

である。にも関らず、大萬川柳に上位入選し

たことをこれ程までに喜ぶ純情さに私は打た

れた。

入選が重なり続き、人から賞讃されると有

頂天になり、没がつづけば我才能なしと川柳

から遠ざかるのも大に戒めなければならな

が、柳歴を重ねると入選をしてもしなくても

何の感激も反省もなく情性に川柳をつづける

ようになることを一層戒めねばならない。

投句すべき期日が逼って已むを得ず一句を

デッチ上げる、句会へ出席するのもお義理の

ような気持で顔だけ出す、抜けなくとも平然

としているような栓の抜けたビールのような

味気ない柳人になってはならない。

一年を回顧して魂から迸り出た自分の句が

全く無く、ただ何となく川柳をつづけてきた

私に気付き、初心忘れずを五十一年の座右の

銘にしたい。

座右の句

浮草は浮草なりに花が咲き

私の句

疑うて信じて夫婦の歴史なる

（生々庵）

柳 原 静 香



西尾 棨選

大阪市 吉田圭井堂

南無三宝みだしてくれな近く序列

入院が俺でよかった四十度

この平和英雄の出る隙がない

ほどほどに妬けとは関白虫がよい

堤防に沿うて下れば粹な水

刑事から見れば瓜田の靴ばかり

鳥取市 河村日満

曼珠沙華あちこちゲリラ意識かも

ぜいたくな舌が見抜いた隠し味

家計簿に妻も眼鏡でたちむかい

逢うてすぐ別れる言葉なぞきらい

詩つくる趣味に時間の無駄はない

老夫婦妻にははやき言葉とも

香川県 三井醉夢

老醜にふれまじ菊の賀にあそぶ

長命にあやかるべきか菊の盃

菊花展出て安らぎを得た野菊

喪服着る日が続くかなこおろぎよ

火葬場の煙りいのちは雲になり

みの虫よ月の光りを父と見よ

大阪市 不二田一三夫

柿の朱へ柵のペンキは白にする

父似か母似か 亀の子目がさびし

いづも屋で寛美の批評して別れ

「とんぼり」を「ガーデン・ロード」にしてしまい

味方にはハト 敵に回わせばタカとかや

スポニチへ「女唇」発表(50年9月23日)30回連載

漫才がポルノにかわるペンの色

松原市 谷垣史好

秋の空きょうも小さな嘘をつき

金色に生ぶ毛が光る女 秋

革命の闘士はいつも飢えている

子供会のことです今夜も出てはりま

玄関を出しなに用を云う女

煮豆屋の夫婦の顔も十二月

八尾市 大路 美幸

入院へすつ飛んで来た友情

暗闇に祈れば亡母の声ばかり

あるときのおんな 女王になりたがる

版画家のころを一枚ずつめくる

捨て切つて大樹寡黙に春を待つ

千の門閉ざせば千の風が止む

島根県 堀江 芳子

生かされていのちの重み夫がいる

三合の暮らしに馴れて炊飯器

すべらしたひと言許そう天高し

父さんと廻す歯車あせらない

初孫を願う茶絶ちと娘も知らず

余韻まだ肩躍らして駆けてゆく

桜井市 岩本 雀踊子

蜂の巣のようなマンションに住む孤独

不思議なほど小遣持っている夫

逆らわぬ女の横顔憎くなる

ゆずられた席で老人ねむくなる

職安でパチンコだこをなせている

裏階段足音ぬすむ音になり

神戸市 小浜 牧人

喝采が欲しい道化の赤い鼻

狂い咲く色濃き花の業を思う

もう一人のわたしは憎いエゴイスト

ワキ役の犠牲バンドに生かされる

変人の生甲斐こつこつ金を蓄め

街角の出会い運命狂わせる

松江市 小林 孤呂二

幸せか七転び八起きの苦に墜ちず

この道が好き家並は開府からのまま

はっとした一言仮面とり忘れ

答弁はドレミファどおりには言えず

職責に徹して白髪気にならず

竹原市 三宅 不朽

秋の風ひとりひとりの影にする

白鳥の啓示のごとく霧に湧く

歳月の起伏を真直ぐ杉は生き

風の彩みえる気もする秋の笛

好きですと言われ欠点が見えはじめ

藤井寺市 西 いわを

コスモスは貸農園で秋を告げ

複眼に写る獲物を身構える

権力の座を降りてから老人会

愚痴いうて甘えてるなと自省

変身に耐えて蛹は眠るのみ

青森市 工藤 甲吉

聖人のようなくらしをバカと言う

逆さまの世の中何も彼も虚し

盛者必衰杖ついてやって来る

としよりとトンボは秋の日だまりへ
七輪で焼いてくれると秋刀魚言ひ

大阪市 阪上十止庵

親に似るその当然が怖くなる
敬老の名である時は差別され
立て膝になって裏目を張りつつけ
制服のない浪人の赤いシヤツ
ひと筋の髪まで女臙がある

大阪市 小出智子

ウインドウの前で地団太踏んでいる
とてつもなく長いドラマのピエロ役
古い柱にわたしを縛りつけておく
マニキュアが剥げると糠味増臭くなる
枯れてしまった愛を弔う花を買う

大阪市 金井文秋

週刊誌記者の主観で臙を接ぎ
裏話聞かせたくない有頂天
贅沢な悩み別荘の蚊が攻める
正月だ祭りだ禁酒おびやかし
不協和音二人の歩巾恋がない

西宮市 若林草右

いたずらの孫の字に似た書道展
つむじ曲りとへそ曲り話また曲り

陛下訪米（三句）

さびしさはあげ給う手にない帽子

顕微鏡今日は学者の眼でのぞき
レイかけて人間天皇旗の波

兵庫県 遠山可住

年寄りの匂いが洗濯機へ頑固
丸刈りにしてじんわりと抵抗す
三十年満期小銭が戻つて来
三十年のへだたり握手の血が乱れ
射程距離内で二番にあるゆとり

岸和田市 高橋操子

太陽は一つ平和と争いと
いい親になるんだうさはぐつとのみ
相性の悪さへ努力する二人
満月にあらずともよし秋の月
お化粧を落し母子寮の灯へ帰る

倉敷市 水粉千翁

食べ過ぎてはめ足らぬ秋深うなり
押せ押せのムードで越せぬ陥し穴
鞭打って見せぬ涙を拭いている
庭つづき匍い寄る四季の捨て難く
すがりたいところで母にふり向かれ

八尾市 宮西弥生

原点に戻れば欲が消えていた
穴の中私だけにある平和
街の音とめて画廊の奥にいる
子も親に頼らぬ主義で迷子馴れ

山が乳房に見えた亡母を恋う

岡山県 嘉数千代香

富田林市 岩田美代

四捨五入の四捨へあなたの短所捨て
美しい鎖でつなぐ嫁姑

威張ってる風は自由が許されず

心配はないとあなたは第三者

やりくりへ金は冷たく笑うだけ

宝塚市 傍島静馬

健忘症メモしたメモが見当らず

いつ死んでもよいのがソロバン離さない

忘れたころ出せばオカラに舌鼓

ニールック驕る女の口軽し

なかなかに闘病阿呆になりきれず

八尾市 香川酔々

自由自在に枯葉を舞わす去來の墓

秋刀魚の頭一つ拾って犬の秋

吹き降りの駅の灯ひとつ救いの灯

魚眼レンズ透して麗女となる女

言霊の国六法に悩まされ

神戸市 中村ゆきを

ねじ一つ抜けたペースで身を守り

越し方の友はやっぱり酒の友

新人をいびるつもの下が来ず

棹させば流されそうな話聞く

近くに住んでスーパでも始め

節くれの十指を見られまいとする

このへんで笑うとく顔がゆがみそう

うどんげの花を信じる日の疲れ

秋雨のしとしと手紙書けと言う

受賞

十月の彩に私の鳩が舞う

貝塚市 野坂つき子

秋晴れにテキパキ家事の楽しさよ

誘惑に負けおしることを追加する

よく食べてよく寝て悔を残さない

ライバルとしての友情温めてる

さわやかな便りハミングついて出る

三重県 川上大輪

褒められてから先生が好きになり

戦争を恰好良くさせるプラモデル

悪女にはなれそうもなし米洗う

雲を描く少年雲に抱かれる

例え話の中で結論考える

大阪市 本多柳志

十字路へ来て愛人の掌を拒み

鈍行も佳し生涯の旅ならば

会いに行く雨の予報を迷わない

全身で女見つめる猫目石

甘やかす躰けを叱る聴診器

藤井寺市 児島与呂志

いい妻で居られる今日も母静か
押入れを片付けただけ又増やし
捨て石と見せて伏石打ち返し
吹きぶりのチャイムせわしく娘が帰り
孫よりもまわりがじじにしてしまひ

倉吉市 奥谷弘朗

見通しの暗さがつのる孤独感
丹精の菊が待ってる誕生日
家柄と愛天秤にもめ続け
定年の不安かきたて友が逝く
締切の投句へ孫が遊びに来

島根県 小砂白汀

二人目を孕み軌道が外せない
申し分ないがアルファ欲しい彼
割箸はうどんの急所知っている
予約札その手は鬼ようもう古い
踵までもちあげせいだかあわだち草

大阪市 西出一栄

彼岸花緋を萌やして川柳忌
鈴虫へ補聴器調節して老母
闘病のそれでもつくる秋の服
息子はビール孫はサイダー老玉露
ケチって蓄めて大名使いするも旅

米子市 林瑞枝

我を捨てて案山子平和に生きる知恵
誇りたい話題は老父母だけに向け
季節待つ花は根を張り枝を張り
貪欲なひとりを護る願いごと
榎の実の落ちて大樹の夢捨てず

柏原市 大峠可動

十二月の風地団太踏んでいる
枯葉逝く瘦せた男の詩のように
秒針よ老いゆく父を責めるのか
われら人間平和を望む書をあさる
直線はよそう心の詩が高まらぬ

八尾市 高橋夕花

バラほどの棘ではないがわたくしに
たとう紙愛の匂いはまだ消えず
ためらいもなく菊を剪る我が奢り
諍いのおとを烈しく髪洗う
枯草の匂いを愛の果てとみる

愛媛県 渡辺曉童

仏さまにも ひびくインフレ
観音さまは 床の置物
降り照りなしで 凌ぐ年金
涙みせれば すぐに乗るやつ
味わいのない ゴム長の露

電卓に馴染めず五玉をまたはしき
尼崎市 黒川紫香

秋の月故郷のないのを淋しがり
露地裏の堀から猫に見下ろされ

寮長辞任

引退を知るや寮にする落葉

寮の娘にこんどはしんみり握手する

倉敷市 野田素身郎

窓を鏡に夜汽車の女観察す

棒読みの答弁野党も眠りだし

しょんぼりと帰れば犬もじゃれつかず

曼珠沙華繚乱無縁墓地静か

枯葉舞う左還の内示今日うける

東京都 山根白星

まだ楽にさせぬ死後硬直がある

あやかりたく思う紙ヒコーキ飛ばす

縮尺の血は争えぬ乳母車

氣を替えて見て木洩れ陽に髪を梳く

レントゲンだっこちゃんにも似て撮られ

高槻市 若柳潮花

俗名で手向けて帰る亀の井戸

甘酒へ紅葉を流す嵯峨の雨

にこりえのお力が濡らす枕紙

宗匠へ明神さまの向う槌

着流しで舞う夕月へ舟がなく

西宮市 島居百酒

嘯うなら嘯え軍歌で戦友の会

黙禱に浮かぶ戦友らは一等兵
軍隊語笑いを蒔いて酌ぎまわり
出世の自叙伝ちよつぱり粉飾し
学校で習った言葉をパパ毀し

大阪市 有信新之助

虫のようからっと乾いて死にたいな

嫁きそびれそうなバイオリン提げている

キャンプで男が教えた御飯炊き

ビール栓を勲章にする夢もなし

何処かの癌で死にそうに不摂生

八尾市 高杉鬼遊

秋のおと桐いちまいの重みなり

お喋りな男へ眼鏡ふいてみる

騙されてそれから騙す側になり

貧しさの一色もなし絵具皿

十二月忙中閑や賀状の想

大阪市 山川阿茶

下手くその色紙貰うもエチケツト

就職に頭を刈って節をかえ

本物とスリだけ知ってるネックレス

ゴキブリへ潜在してるサディズム

うろこ雲小紋の色合い考える

愛媛県

村上旭童

生きてるだけで良いとは悟れない

この島に生えて不運の松の丈

飲める時飲み過ぎたとは口にせず

新築へ移り仏壇おちつかず

完敗をスロービデオが又写し

倉敷市 小幡里風

倅は小廻りのきく妻達者

秋深し太陽昇る位置をかえ

収穫期冷戦どちらともなく口をきき

野菊咲くここに奇蹟のあったとこ

去來する愛憎合鍵見当らず

仙台市 川村映輝

婦人年コマーションアルまで囁みつけれ

停年を待っていたのは名誉職

物価高日本人はよく太り

先生はうようよ教育者見当らず

オールドミスになって独身主義という

水見市 関美子

木枯しかいいえ夫の骨が鳴る

見せられぬ涙はのどを灼いて落ち

かたくなに塗る洪刷毛も片減りで

受話器置く作り笑いを見たような

新しい廃虚だ閉店舗が並ぶ

和歌山市 沢山福水

山道を登る夫の手の温み

一本のへちまわが家の化粧水

失神をするほど甘く囁やかれ

湯上りの素顔鏡に笑われる
鍵穴の死角に不倫燃えている

大阪市 津守柳信

まだ四十刺激を避ける護身術
充実感欲しい女にある孤独

不自然の背筋へささる疑惑の眼

無駄使いたくないさせないのに赤字

恍惚と遊ぶダルマも起き上り

守口市 羽原静歩

錦鯉涅槃の瞳泳がせる

償いの視野に子がいて妻がいて

ちぎれ雲ちぎれて迷いの雲となる

草より現われ草に消える旅愁

てこずる孫は眼に入れて痛し

堺市 高橋千乃子

結婚シーズンすっかりつかれた貸衣裳

さんばつ代一日百円ずつのびる

不器量も美人も同じ影法師

青いまま落ちた柿の実姉の恋

来客に素直な子供へ早変わり

島根県 錦織文子

豊作へ案山子必死の弓を引く

安産の願へ澄んだ鈴が鳴り

遊説も暗殺という罊が待ち

あますとこなきまま燃えて曼珠沙華

未だ染めぬ誇りをもって亡母ゆずり

鳥取県 清水一保

農業に益虫矢張り死んで行き

地下足袋のはころび主人の汗を知り

我が顔をじっと鏡も問い返し

夕暮れて野らにミレーの絵が浮かび

そっとペン置けば鈴虫そっと止み

守口市 野呂右近

天秤に乗せたら理性今日も勝ち

鍵穴も無いまま老の戸を閉じて

まろやかに老ける糧にと本を撰る

心の動きグラフになれば見て居れず

じわじわと原油に首を締められる

神戸市 仲どんたく

娘みな売切れ申し夫婦だけ

我が家も国鉄並みと妻が云う

一人旅今宵不逞のあれやこれ

その後は声とはならず嫁つがせる

靖国神社にて

特攻の喊声聞こゆ九段坂

今治市 原田一風

聞いてから言わぬが花を思い出し

引き返すほどでも無くて濡れ続け

ハネムーンの靴特売場では買わず

煙草一つやめられぬの意見口

停年が見えたで通う書道塾

大阪市 中川滋雀

わだかまり燃やす枯葉をかき寄せる

信心とは別に札所の秋を踏む

ずぶ濡れのいっそ激しい満足感

曲り角この足音を高く踏み

焼香の列 再会の老いに触れ

竹原市 時広一路

石段が僕の歩巾を変えさせる

鋼鉄も熱の強さへ溶けてやり

雨雲が足を早めたように来る

酒飲んだ位で晴れる悩みごと

今の今だけは悟っている境地

鳥取市 両川洋々

砂丘(五句)

雲なにを急ぐか砂丘斜に飛び

寝転べば砂にくつろぐ詩があり

セツトした髪にすきない風が吹き

団体が砂の鼓動をかき乱し

なに思案したのか足跡ここで切れ

東大阪市 落合思月

妻と子の対談夫はほっとかれ

二代目の居職ブライド持ちつづけ

住みついて野良猫我がもの顔で居る

一と筋の愛つらぬいて嫁かず後家

主導権どちらにあらうと妻はつま

泉大津市 村上春巳

神主の疲れそろそろ午後三時

駅長も今日は娘を送る窓

プラモデル親子の意見うまく合

灯台の白さに続く彼岸花

日本語の外人さんと坂を行き

豊中市 戸田古方

虫が鳴くのでごみだめを振り返る

オン・パレード台風一過の雲続く

グレンミラー素直に五線紙を飾る

コップが描けても一人前ではなくて

祝いごとこれも女房にまかせきり

岡山县 池田古心

岡大入院中

俺も頑固病氣も頑固年越さん

名月も病床で見りや只の月

俺自身いざり勝五郎になろうとは

病院の上でも鳶ののどかなり

皺一つ一つ無くなる恢復期

竹原市 小島蘭幸

人気歌手素人ぼさがまだ残り

ライバルをはめて負けてはいないなり

どんちゃんさわぎのなかにやすらぎがある

タイトルを守る苦しさ口にせず

口髭は住所不定の男とか

和歌山市 垂井千寿子

サングラス都会の死角に消えて行く

亡夫の分まで親馬鹿になっていた

寡婦のメガネ狭い世間を写してる

笑っても泣いても女ポーズする

子の嫁をいつか女の目で見てた

大阪市 神谷凡九郎

それもこれも大きな愛やと思っておこ

また降りてしめた無人駅のようなとこ

人生のレール乗り継ぐ駅に停る駅

作り方もおますがやっぱりあなたが作るのや

害虫にさえも神は生命を賜って

大阪市 江城修史

子に賭ける夫婦に終着駅がない

居職の灯守り自由が狭められ

人生の所詮はひとり孤に戻る

つぎ足して聞くにも嘘が多すぎる

待ち呆け馬鹿ねと枯葉が脊を打つ

倉敷市 小野克枝

博多にて三十年振りの同窓会

三十年遠くて近い走馬灯

三十年を語るに足りぬ秒針よ

遙かなる異郷の校歌涙して

セーラーの顔探し合い抱き合い

金脈も無くて夫婦の笑い顔

今治市 越智 一水

公害裁判勝つても指は曲らない

あせるからよけい足もとすくわれる

東京の不況は嘘かアドバルン

奥多摩、秋川にて

東京に秘境があり松原村

キャンプならここがよからう水の音

大和郡山市 森田 カズエ

通勤の朝の車内の大あくび

バイバイへよい按配の曲り角

祈祷料最低額は明示され

カッとしてやったと恐いことを云う

マタニティ売場あちらも母娘連れ

和歌山市 野村 太茂津

今朝も始発明日も始発の心澄み

胸張って肩肘張らねばまるやかに

点火時期寸前にある底力

鯛雲心揺がす五線譜か

敷いてゆく軌道を磨く砂を撰り

堺市 河内 天笑

受話器から酒の匂いが洩れそう

雨になりそうでお酒を追加する

十字架を酒で洗うと赤くなる

酒の精女の吐息見てしまふ

グラス片手に人工衛星見つけたり

富田林市 板尾 岳人

滝落ちる音にテントが軒する

天皇に逢えるかも知れぬ山の峰

滝となる金剛山の水を飲む

十二月雪と喋られる山の峰

雪を待つ峰を太陽掃除する

大阪市 大坂 形水

銀行の担保になっている豪邸

社長夫人会社の危機を知ってない

責任をうやむやにするポスト替え

正義派を自認している総会屋

無気味さがちらりボスの大阪弁

新宮市 大矢 十郎

十六の媚還暦へ火をつける

ああ平和電灯つけて野球する

列島改造信濃川原に大堤

眼鏡越し守銭奴の目に疑われ

名古屋市 吉田 水車

天皇皇后両陛下ご訪米二句（九月三十日）

このたびはいとリラックスに在しまし

画趣もととのうアメリカ古都の秋

柳翁忌（二句）

柳翁はここあたりか江戸古地図

婦警さんピリピリと怒りやはり

京都市 都倉求芽

割勘の半端でいいカッコするつもり

野良猫の智慧が家中振り廻し

夕焼けが消えるまで歩幅遅らせる

秋風へ私一人の野が揺れる

島根県 堀江正朗

酔うても妻の動きを知っている

雨もりの昨日と違う音で鳴り

新聞のコトリに老いの耳さどく

バリュームを飲んで胃袋確かめる

大阪市 河野君子

秋の翳は写してならぬルージュひく

秋の風人の噂さを聞き流す

からっぽの虫籠残して逝った秋

三食昼寝つきママの玩具は受話器です

松江市 吉岡通児

十月を鯉の季節にしてカープ

五十年可もなく不可もなくして禿げ

尋ね人ばくと同姓背丈年

大抵の事じゃ怯えぬ世が哀し

岡山県 直原七面山

移り香に酔う初生な恋

ガラス戸越しに娘の裸身

長閑けさを告ぐ木魚の音

影がグリーンと伸びて秋

松江市 岡崎祥月

秋はセンチ秋のとりこになつておく

日々好日笑つてくらす老いの幸

親は親 はたらく道に歩を進め

書道展子は万葉の歌知らず

高槻市 福田丁路

出勤簿無しの田圃で気が軽し

振袖に変心彼氏戸惑わせ

遅ましく育つて雑草引抜かれ

奥の手は手取り早く負けて勝ち

岡山県 出原敬一

石蹴りの石が蛙をおどろかせ

空財布妻が隠さぬ筈がない

話題なき夫婦夕餉の茄子を焼く

精神医この魂はぬけている

伊丹市 小川静観堂

山彦をとんと聞かなくなった耳

わが天寿米寿でしたか白寿ですか

甲吉とおんなじ恰好で甘えたる

紫の蒲団も出して衣更え

富田林市 和田維久子

鬼押出し固い契りの岩にたつ

往きもひとり帰りもひとり氷雨降る

秘密ない二人になつて戸惑いぬ

人ごとでないすり傷をなめている

大阪市 天正千梢

水さびの浮きし濛なり余生かも

杯の中に孤独の地獄を見

盆点前しばし味わう寂び心

たかぶる心が調和みだしかけ

西宮市 藤村ノ女

貧乏が生涯私を弄び

落葉して心に迫る風も冬

お歳暮の包装紙にも見得がある

他愛ない嘘が可愛い孫の嘘

松江市 恒松町紅

倅せが踏む靴音にこだまする

開店へ集金に来て叱られる

七人の敵に出会わず秋暮れる

お隣りの庭園燈に照らされる

尼崎市 高津徹也

秋雨の中では老母はなお女

被写体に不適女の泣く涙

素朴なら恋は卑しい視線を見ない

寶石の座す位置一つ淋しけり

松原市 玉置重人

燃え尽す血汐が欲しいある日ふと

稼ぐ気のホステス隙間あけておき

便利な地下鉄に不便な階段

トライするようにラッシュを乗る若さ

松江市 柳楽鶴丸

作品の年輪に恐しさ感じた日

初恋の女を知ってる川之音

二物を与えずと神様嘘をつき

僕の血が入って悪妻になった

兵庫県 河原みのる

キカイ機械一億ブキツチョにして丁い

建て増しはこれだけ儲かりました分

八千まで大丈夫ですがちと不足

断酒して献酬キタナイものに見え

大阪市 西川誓二

法の番人だのに破邪の剣抜かず

こは如何にうまく化した試算表

心鎮まるムードにしたインテリア

太陽ありがとううちも風呂がわきました

大阪市 河井庸佑

はじめから尋ねてくればよいものを

うちの子を探す間もなく遊戯すむ

お互いに心得えている妥協点

横車押しても駄目と知って押す

枚方市 宮川珠笑

再会の酌ぐ手受ける手ふるえてる

花も嵐も踏み越え進むタミナル

ようお疲れさん自動販売機

早起きの得は新聞早く読め

岡山県 竹内翁童

しきたりの今に生きてる田舎町
失保切れる日プライドくずれ去り
まあまああ魚心を置いてくる
青春の情熱平凡な日を憎む

大阪市 黒田真砂

泣く時も女周囲を意識する
おくれ毛を上げる手も老いて艶
画布無心に染めて心の安息日
心の糸に触れれば思慕が尚つものり

島根県 神原秀子

しがみつく桜葉 秋や秋
月皎々人の足跡などみせず
蹠とるよろこび年にこだわらず
ふりかえるわが道悔があるばかり

岸和田市 葛城伊三郎

猛犬に注意の札の無責任
一言を控えて嫁が見直され
遺産分け不甲斐ない子が欲を張り
利息まで先に取られて判を捺し

守口市 村田瓢太

とばけた顔してても金は握っとり
紳士協定もいざともなれば守られず
人生のめぐり合わせの不思議さよ
そこからは内輪の悩みまで見えす

美祿市 安平次弘道

裏方に感謝主役の座が続く
愛至上女は盗んでまで貢ぎ
死ぬ勇氣生きる勇氣になぜ変えぬ
秒針の音は命の減る音か

倉敷市 松下梁水

清貧の誇り大地を踏みしめる
山彦は素直に馬鹿と言ってくれ
一徹を逆手に取るも妻の智慧
輪の中で私の主義が折れてくる

大阪市 西森花村

嬉しさにうっかり本音出てしまい
核保有広がつてゆく癌に似る
職場での親がピエロに見える歳
海は油山は空きカン行楽日

竹原市 森井菁居

苦しくはないさ目標もつ限り
スランプの相手に酒がなってくれ
魂は売るまい運は逃がしても
妻子にはセールス日誌見せまいぞ

羽曳野市 塩満敏

衣替えナフタリンの香が満員車
カド番の力士が優勝してしまい
汽車ポッポ北海道でつかまえる
いそがしい仕事いそがしい男に頼み

出雲市 原 独 仙

婚礼と悔み隣保へ忙しい

あの空で散った吾子あり海洋博

阿呆らしや持つて物を探す齡

結構な趣味と賞めるかくさすのか

岸和田市 植 山 武 助

本当の母の素顔を見た寝息

ルージュ濃い過程は女の歴史かも

憂さ晴らす叱言と妻は知っている

止まるとこなし義理義理と云う浪費

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

旧師なり恩は恩だが保険屋の

椰子の実でつないだこともある七十

使われる方が小金を貯めている

うちはいいと娘の家から妻帰る

堺市 伏 見 茂 美

縁遠い娘はえんりよなしキモノ展

母の旅犬の食事メモにあり

ソロバ塾ムシムシヤ食べて順をまち

向側と雑談市場の昼下り

生駒市 草 深 醉 升

昼寝する耳へ平和な雨の音

ピストルのお国へ陛下御苦労様

費うためのお金ですよと妻も老い

黒い霧いつの間にやら消えてゆき

大阪市 宮 尾 あ い き

よその旦那と並んだ写真へ気兼ねする

秘めている年令匂わせるサロンパス

ポイントの眼元皮肉にしわが増え

ファッションショー別の世界の出来事か

京都市 松 川 杜 的

断絶が始まる嫁が来たその日から

肩の荷をおろした途端風邪をひき

新郎新婦八幡さんの鳩と撮り

六十才の涙子に見せまいとする

岸和田市 福 浦 勝 晴

コソ泥のように師走のコップ酒

目のまわる首のまわらぬ十二月

嘘と嘘華麗に燃えるナイト・バー

よろめいたついでに時計持つて去に

平田市 久 家 代 仕 男

敵意なぞまだ人間のちっぽばすぎ

さりげない言葉の端にある温み

甘く見た明治に気骨教えられ

羽音さえ物倦くとまる秋の蠅

大阪市 飛 田 好 一

情熱に負けそうそと目をそらす

底抜けの友情靴がちびている

旗を振る男一人が背のびする

非を悟る心に月が丸う映え

大阪市 藤田頂留子

ちゃんと裏袷仕立て法改正

逆に針まわして見たい日のあがき

不況不況けど三度々は食べてます

遠山の金さん

顔替えて日本人の桜好き

鳥取市 小林由多香

赤とんぼ見つけた話題が膳にのり

生きている砂丘四季の色を持ち

ひも足して風呂敷一ぱい欲つつむ

遊覧船来春までをつながれる

倉敷市 藤井春日

親子三人それぞれ違った夢を追

大掃除二銭のハガキのお礼状

税務署の調査三日で二キロ痩せ

爆弾とピストルこれでも平和日本か

大阪市 川口弘生

きらめかぬダイヤの味のつむぎ織

ゆっくりと六時を起す寺の鐘

七人の敵へ七つの色を撮る

自己主張する蟻に羽根生えて来る

松江市 中川晃男

国破れ残る山河も喰いつぶし

山削り川濁らせて故郷あり

西暦となって皇紀は生き続け

アメリカの善意の中に両陛下

橿原市

岩井本蔭棒

お疑いならば下着もとりましよか

心齋橋小鼻がうごく茶の香り

ゴミ程に金は落ちない観光地

留守のパパめしのスイッチ入れただけ

竹中肖二

木犀の香りに机の向きを変え

鍵っ子の影がだんだん伸びて暮れ

いつまでもいちゃついている赤電話

洞窟の怨み忘れた槌の音

東大阪市

竹中綾女

入歯洗う夫の仕草が気にかかり

又出張ですかと妻の疑惑の眼

背伸びした横りは無いが金足らず

生き甲斐を次々変えて老いてゆく

小松市

馬場魚山

孫無事にできた報せにお陰知り

身障だから行先は民生課

浜閉じて草履片方打ち上げる

若者の悲恋民謡におり込まれ

宇部市

平田実男

お隣りの豚舎どうにもならぬ風

一世は陛下を神として迎え

飛んで火に入るよに二盗失敗し

奥さんの後を歩いている課長

大田市 藤田 軒太 楼

ふた言目には隣の亭主と比較され

ご多分にもれず懷中無一物

運を天にまかせっきりで明日がない

緩着の一石局面もつれ込み

和歌山市 若宮 武雄

差向いさえも暮しが纏いつき

気がかりヘテッキリ電話のベルが鳴る

落葉から白い煙が過去へ往く

留守のように音も動きもない旧家

東大阪市 斎藤 三十四

酒やめな命とるぞと聴診器

軍服の写真孫に人気あり

年長が念の為と釘を差し

膝ぼんと叩いて男に策があり

和歌山市 内芝 としよ

絆せを見捨てる人と拾う人

旅すれば日本も広いなあと思ひ

別れてからあかも云えばと帰り道

例えばと云い云い本心覗かせる

大阪市 神田 秀峰

金よりも重い命がまた示談

グラマーに見とれて階段けつまずき

値切る時やっぱり算盤気分出る

時変り三歩先を女行き

兵庫県 大江 秋月

衣がえ女ほどには気にもせず

栗の実がはぜて隣りへ越境し

天候が悪くはかどる農作業

赤い羽に協力死んでからの鶏

奈良市 宮口 笛生

いい人に拾うてもらえと予猫捨て

ままならぬお天気旅を雨にする

寒うなる雨とり入れの手を休め

何時の日もかようありたい散髪す

呉市 槇田 英詩

十二月なのに女の長話

人事課の死角でひとり平で老い

父母の好みの妻がいて平和

昇進の辞令やる気の顔となる

大阪市 室谷 徹舟

親馬鹿が孫馬鹿となる顔のしわ

教団のタレントとなる

我が声は電波に乗って家へ来る

つぎはぎの我が人生と塗り変える

あるだけの愛を出しても父は父

大洲市 堀内 暁風

台風の前ぶれだけですんだ幸

二つ三つ流星落ちて不安な夜

少さい声で聞いた返事の大き過ぎ
連休も稼がなならぬ小商人

和歌山市 津田与史

日本はまだ健在です菊花展
月見だんご喰う詩情など忘れ
蹴られても小石生きている転び
恍惚の最後は四畳半となり

大阪市 神夏磯道子

円満な夫婦で仲人頼まれる
故里を慕う音色か虫の声
裏口を渡り先取りの苦を知らず
手ごたえが欲しくて石を投げてみる

神戸市 佐々木静泉

自動扉で故郷はわたしを待っている
浮雲は無限に詩を湧かすはは
もう一言言いたい時に咳がつく
作文の種がつきない夫婦です

岡山市 白岩文衛

素通りの運へせつせと靴みがく
道を説く人賢妻に悩まされ
放牛の幸せ残照背を染める
ハンドルで見れば歩行者でたらめな

和泉市 西岡洛醉

盃を干して女の身構える
判で押す役所勤めに駄馬と化し

朝の背を妻頼り切る腫で送り
宝物ですそっとそっと孫を抱き

和歌山市 吉野富江

みやげ話する人も無き寡婦の旅
艶聞を撒いて他人を疎んじる
文無しで獅子の如くにバーのママ
さようなら言わずに逝った徳な人

鳥取県 林露杖

雁来紅燃えて不惑の思慕つもの
艶めいた娘に亡妻のしなをみる
七十の愀気落葉を叩く雨
ひざ慕う仔猫は温もり欲しいだけ

松山市 谷のぶお

そうむきになるなど腹の虫も老い
動く夜ナイトショップの灯が明い
かまきりを掌にのせて見る俺に似る
わかつてはいても反対党である

姫路市 梅谿庵不醉

買なはれまけておきます停年者
回診の知らせ隠したしわの乳
泰山鳴動それでも妻はこわいでしょ

貝塚市 行天千代

遠雷も寝ながら聞けば又たのし
窓からは月見えぬ程建ち並び
外出嫌い仮縫いだけはたのまれず

秋風が僕の暮しに逆わず

はったりを言う上役をもて余し
退け時間靴音を呼ぶネオンの灯

高槻市 山田季賛

倉敷市 能登原白水

波乗りの波に同調させる智恵

衣食住天が与えるたのもしさ
文鎮となりきる妻の癖愛す

宿毛市 山本窓花

原色のままで融通きかぬなり

くつろぎは手形落したその夜だけ
止ってる振子だらしく見えた日

鳥取県 森田布堂

新工法自慢の家が風に飛び

夫婦喧嘩ストップさせる客が来る
休日妻に白髪を抜かせられ

唐津市 新岡回天子

牛の口かみ切りそうにススキ喰い

特技ある為に社員に怪しまれ
鳩をとるなどと思わぬ神社内

米子市 増田竹馬

木犀をどこから運ぶ夜の風

夜更しも朝寝も気憊老の秋
皿まわしヒヤッとさせるも芸の味

玉野市 小谷仙山

永住の地がほしかりうに渡り鳥
過去の謎解いて童話が一つ消え
転ばぬ先に支えて甘い子に育て

鳥取市 大塚豊生

反省の涙をじつと子が見つめ

独身を反省してる娘の乗り気
真髓を手の中に入れ船細工

鳥根県 松本昌

倅せのリズム妻の寝息と子の寝息

泣きじゃくる子に正論が聞き取れず
神おがむ手が万引をするあわれ

滋賀県 溝口はやを

親馬鹿のお猿の玩具太鼓打つ

アイシャドーおもしろい顔が出来上り
告訴してはみづみのついた舌になり

正本水客

鳥の声せず高原の霧うごかずに

水走り抜けて山葵田秋になる
釜鳴りの部屋にしばらく人がいず

中腰でいる友情に頼りきる
自然が自然のままに息をする

橘高薫風

晩秋に水が一番重くなる

秋深む眼鏡外した父の顔
朝々のわが家の前のマンホール

氷囊の下から見てる好きな人
秋灯に葵水遺句集あたかし

川村好郎

いかに生きるか長寿を願うより
急逝とか街はいつもの音で明け
あこがれの虹薄れゆくむなしさに
お流れ頂戴銀行に食い下り
秋灯下たてよこの計まだ合わず

西尾 榮

ゆんべのおかず仲々思い出せぬこと
お隣りの午前様で妻にもて
ぼうふらは楽天主義と間違われ
民芸の徳利の前の旧き友
珍品を集めて至極真面目なり

菊沢小松園

鈴虫の私ひとりへ鳴いて居ず
千羽鶴きつちり折るから咳が出る
野仏も不機嫌となる人の群
膚寒いことも手紙に言い添える
かくれんぼ鬼になる子は少しませ

若本多久志

人生の秋の稔りも中くらい
カップヌードルへ抵抗するも古い
捨てるもの捨てたつもりがまだ悩み
病院の廊下互に秘めた胸

ざわつきの世に生き秋の山が好き

尼 緑之助

夕陽ゆっくり鮎釣り動かない

井倉洞

清流に紅葉洞窟と滝を持ち

湯郷温泉

日本一名乗るヌードについて行く
バスの旅迎えてくれる曼珠沙華
終バスにOLはばかりなき欠伸

浜田久米雄

本人に言えぬ病名とは悲し

早期発見わかりすぎることながら
冗談を言えない人とまた出合い

年寄りとの話しんどいことばかり

足踏みをしてまっすぐに行くと決め

本田恵二朗

農薬の功罪天秤にかけてみる

米寿翁の日課が朝の露を踏む

老松の幹を伝うて月のぼる

溪流を絵にしてもみじもえている

滝のぼりめいた根性をあぶながら

お願い——新年号は印刷所も多忙につき、原稿をいつも
の月より早く入れますので締切日をお守りください。



若き日の川上日車

林生路郎物語

(12)

— 童謡流行と新興川柳の台頭 —

東 野 大 八

路郎が著述業として本格的な文筆活動を開始したのは大正十一年の三十五歳である。山雨楼メモに「童謡の森」出版、著述業として本式に手を染めることになった」とある。

「路郎さんが古本屋で見付けたという路郎生、大正十一年春秋の茶屋の遅日荘にてと序文にあります。それを今、書棚から出してみました。童謡の編纂したものです」(霞乃書簡)

昭和四年の改造社刊「現代日本文学全集」

「現代日本詩集」篇で、北原白秋が「明治大正詩史概観」のなかに次のように書いている。「まさしく時は大正に入って新民謡の氣勢が昂ってきた。一つには大正七年七月童謡童謡雑誌「赤い鳥」の創刊によって、以来自覚の上に立った新童謡の作家の簇出雲のごとく、その童謡の普及に隆んにして、新時代の民謡もいよいよ確実性を帯びて来つつ、蒐集、研究、論戦もまた詩壇的となった。この期において白秋の作最も多かった。野口雨情も民謡に復活した。」

新童謡の大正中期後の興隆は、「学校に家庭にまたは音楽会に、ラジオにレコードに、

今やとうとうとして浸潤しつつある。この運動に従って既に左記の件々が興隆した。

一、詩壇の諸家、有名なるも無名なるも問わず、たちまちこの新運動に共応し競いたち加った。

一、新進童謡作家の輩出。「赤い鳥」以外の模放雑誌の頻々たる刊行。

一、国定唱歌に対する童謡の代唱、これは児童自身の自由詩集の発行となった。

路郎の童謡関連の編集は、面識ある白秋やその関連者たちによるものと想像された。しかし、大正末期の新童謡の爆発的興隆ぶりも「真実者には困惑と苦笑をさえ催さしむる俗悪な流行にまで墮ちた。芸術児童雑誌の乱行、童謡童謡曲集の乱発、和洋童謡踊りの試演、レコード、ラジオの吹込、放送の乱発、遂には無理解と乱擾と潜童謡との混雑と喧噪とが、真の正しい芸術童謡を猥りに冒瀆し、真の児童自由詩の向上を阻止しつつある。追従者と雷同者の誤った模倣と利用とは、実に童心の思無邪境をして刻々に俗情の地獄たらし

めつつあるのである。物極ればすべて乱れる。大正の童謡運動には早くも衰退の芽ざしが現れはじめた。衰頹すべきは衰頹させたがいい、真の優れた童謡は、しかもなお本質の光輝を光輝するであらう」(北原白秋同上)

白秋も指摘する如く童謡は童心童謡の歌謡である。童謡もまた詩の中の一つの道であるわけで、路郎もこれを認め、炊然とその編集に熱中したのであることは想像に難くない。

だが、路郎は大正日日新聞や、毎日新聞のマスコミ畑に身を置いたことによるジャーナリスト的感觸が、絶えず心証の底辺にわだかまっていたことは否定できない。童謡関連の編集に当る以前にも「商業の大日本」(大正八年)主幹として一時期を過ごし、「土団子」創刊号にもその編集後記に「変な雑誌で、愉快な雑誌で、売れる雑誌で広告の利く雑誌を出すことにした」と書いているし、「川柳雑誌」の創刊号も「売れる雑誌」に徹底し、のちに新聞社並の「有保証紙」の権利さえ取得していることである。壮年期における数々の

出版刊行物を手がけた実績もまた以上の著述者の感覚による。

余談だが、さきの「商業の大日本」主幹時代「同じ社に机を並べていた『工業の大日本』主幹、風見卓が第二次近衛内閣の司法大臣になる。二むかし前の仲を思えば……」と昭和十五年の頂の山雨楼メモにある。(同一の社が経済関連のシリーズ刊行物を数種発行していたらしい)

「路郎は大変放送を嫌っていました、朝のお茶の間の時間何かで、放送もしています。講談倶楽部の柳壇も担当していて、句稿を飛行機で送っています。またサンデー毎日常週刊朝日か、どちらかの懸賞川柳の選をしてたこともありました。投句数は講談倶楽部の比ではありません。曲尺で一尺四方、厚さもそれに近いものでした。私が葵素女の匿名で「結婚前後」とかいふ題で、サンデー毎日常週刊朝日へ書いたことがあります」(殿乃書簡)

大正十一、二年の頂の山雨楼メモには、断片的に路郎の手になるつぎの記述がある。
「『番傘』に『ホトトギス』六月号の俳句、川柳比較論について一短篇小説のエッセンスのようなきつい人間性のある句を作りたい。人間味のハチ切れそうな句、川柳家は社会批評家である」

「尼崎市の図書館の楼上で、武藤山治氏に始めて会ったとき、新聞人のSが僕を武藤氏に紹介した川柳家だといった。ところが武藤氏は言下に「隠れたる天才ですね」と僕に

ささやいた」

「傘百句会、鉛ン坊の旅情を慰め旁ら、一人百句会を蚊象居で催す。鉛ン坊、水府、蚊象、緑天、佳汀、五葉、路郎で、路郎は三十六句入選第一位を占む」

「番傘」を「五葉足下」と題した松窓(斎藤 いわく)森の家は、新生を個人雑誌にした、ソレが本当である。川柳を革新しようと思えば道連れが多いのは障害が多い。往年の新傾向派鉄羅漢君は川柳に飽き、路郎君または考え中という形である」

この辺で川柳界にとっては、刮目すべき「新興川柳」の台頭について触れておかねばなるまい。

新興川柳といえは、たちどころに想起されるのが田中五呂八、森田一二の名である。新興川柳なる呼称の名付け親は五呂八で、その呼称に先だつのが新生川柳であった。一二が手がけた革新的な新川柳誌「新生」からによる。時に大正十一年六月、この川柳史上、画期的な柳誌の発刊は、意外にも東京でも関西でもなく一二の住む名古屋市であったことだ。

「森田一二氏は、革新運動の極左傾(傾向主義)にある人で、「新生」という個人雑誌を創刊して、川柳家の自覚にむかつて大きな爆弾を投じた唯一の先駆精神に富んだ思想家であり、創作家であります。氏は「新生」の創刊号に

「神なるべからず。仏なるべからず。人間

たることの息苦しさに堪え得ずして逃避する者は偶像をつくる。善悪美醜の交錯する処にのみ新しき川柳は生れる」

と述べ、あくまで現実生活を一元的に進めようとする川柳家としての強烈な要求と理想とをもつて時代の民衆と共に生きようとし、また時代の思想界へ何等かの交渉と反映も実現しようとする積極的態度です。

——由ケラと云われて紙幣を握られ
——審判の不機嫌な日に刑をうけ
——十二時に重なる針の夜と昼
——一本のマッチを持っている強さ

こうした作品をじつと噛みしめていると、そこには現在の社会組織に対する不合理を指摘する苦悩と憤りが看取されます。これらは既成派の人たちには、異様な川柳でありますが、そこには人間としてのやみ難い要求から真実に生れたものであります」(木村半文著「川柳の作り方新研究」II S・4 刊)

「一二の『新生』に刺戟を受け、大正十二年二月には、期せずして二つの新興川柳誌が力強く誕生した。北海道から五呂八が『氷原』を、大阪から川上日車、木村半文氏による『小康』がそれである。

「田中五呂八氏は、柳誌『氷原』を主宰する思想家であり、柳界唯一の評論家であり、その本質的批評は目下独歩の勢いであります。氏の主張は生命主義の立場から自己の哲学をより深く進めるに就いて川柳の形式に表現する事であります。氏の創作の多くは自己発掘の哲学的課程を踏んでいるのは当然であ

りまして、氏の作品は思案のでありますから、哲学の何かを解しない人々には、一寸理解することは難しいと思われまゝ。それ程に氏の創作は一般詩壇と雁行して進んでいるのであります。

——鞘の奥深く言葉が死んでいる 五呂八

——地の底の仏陀の針が天をさし

——円みさえ知れぬ心の壺を抱く

——白露のまろさ二つが抱きつくし

右の諸作に見るように、その内容はおそろしく思案の、時間と空間を織り込む生命の本流は無限の深奥帯にまで突き進んでいます（木村平文銭・同上）

一二と五呂八は、人間の主観的深層表現を主張し、必然個性尊重の強烈さを表面化するため、その理論的革新詩論の行手には、もはや伝統川柳の存在さえ認めない態度のものである。したがってその理論斗争の凄じさは、伝統成川柳を真向から粉碎する気魄に溢れ、一二、五呂八すら互いに論詰しあい、あたかも第三者をして仇敵の間柄とすら成得せしめただけである。

この一二、五呂八の理論的革新派の屹立状態に対し、日車や半文銭の「小康」をはじめ白石維想楼・井上信子の「大正川柳」や、古屋夢村の「影像」や、岡田東魚の「影」村井潮三郎の「黎明」などは、伝統川柳からのいわば革新的進歩派の形で、若干迫力を欠くことになる。

半文銭は自著「川柳作法」で「小康」の趣旨をつぎのように述べている。（要旨）

「革新川柳は、その川柳家の内部的要求によつて生れる短詩で、過去の一切の川柳とはその立脚点を異にしている。既成川柳では自己のやみがいものから生れ、川柳の生命はないが、新興川柳は自己のやみがい衝動から生れるから、その表現されるものは自己の生活であり、自己の心の記録である。その作句動機や衝動は、過去の娯楽気分を全く抛棄しているで、一つは破壊的にみえる。これは川柳を作る手技や形式を破壊しているが、帰するところは自己の川柳の建設である。同時に自己の生活の建設となるのは当然である」

日車・半文銭の「小康」における作品を参考までに掲げよう。

——芭蕉去って一列白き浪がしら 半文銭

——釈迦の左手に握る一切

——机上より一尺低き民衆よ

——天井へ壁へ心へ鳴る一時

——群衆の口みな動きを溜める空

——夜具を敷くことがこの世の果に似つ

このような新興川柳の台頭を織り込む川柳界の大きな変革に遭遇して、路郎は果してどうこの動きに反応を示したのであるうか。

「日車氏は半文銭氏と共に『小康』を出したが、私は日車の強請を断じてしりぞけ、これには参加しなかった。（中略）

私は静かに考えた。柳界は麻の如く乱れて全く收拾するところを知らない。何人も川柳を愛しているにはちがいないが、何れも自派

独尊であり、兄弟^{かき}牆にせめぐの類である。これではいけない。お互い川柳家同志が、いかに可なりとして褒めちぎったところで、一歩社会へ出て見れば、まるで社会から川柳の存在が認められていないではないか。これではいけない。ここに眼をつけた私は日車氏らの強請懇望これとめてくれた友情をも振り切つて、社会的な柳誌、社会を対象とする柳誌代行の計画をすすめたのであった。

これは私にとっても、全柳界にとっても一大異変であった。旧同志は私が墮落したかの如く歎じて悲しんだ。金沢へ出掛けて私の意見を發表した時など、翌日同志が私の宿へ押しかけて来て「アレは本気で言ったのですか」と眼の色を変えて膝詰談判を食つたものである。

私は当時の柳誌が豆本式の範囲を出ないこと、兎糞的刊行であること、お互いの間で寄贈本位であること、内輪同志で摩擦ばかりしていること、これでは社会に認められる筈はないことなどを列挙して、私としては俳誌「ホトトギス」を目指して経営をやつていくつもりだ。「ホトトギス」が内容的にどんな地位に置かれていようとすることは別にして、この誌の社会的存在価値は見脱すことができないと思つたからである。そこで新しく出す雑誌は、柳界を代表させる意味と、寸時も早く社会に知らせる便宜上、普遍的な「川柳雑誌」という名にしたのであることをつけ加えた（『川柳雑誌』NO二二九号・雑誌率還・S18・12・所載「若斗四十年」麻生路郎）

俳風柳多留廿五篇研究

—(八丁)—



鈴木 黄

133 黒羽二重でかくれるとしれぬ所

入江―炭部屋の吉良。

真白な夜に真黒な所へ逃げ

五四・20

わく／＼と炭がうこいて百年目

玉・1

貴人は白綿子の寝巻を着用す。

白むくを着てすみっこにかくれてる

二三・23

白むくのいとゞ目に立つ炭俵

安元・天2

黒ひ小袖でかくれると知れぬ所

宮四・20

西原―贅。白であつても、やつとのことで炭

部屋から吉良を発見したのだといわれる。それが黒であつたならもう……との力がこめられてる句。

室山―同。炭の黒と寝巻の白の対照。

岡田―礎稿ご明解。

134 若い時の遊びい役に立ッた子房

入江―張子房、項羽の陣を取り囲み部下に楚国の歌をうたわせ、自分は簫を吹いたので、聞くもの不覚の涙を流し、項羽の八千の子弟

しきりに故郷を思慕した。そして逃亡するものが出たという。

あはアれな声でうたへと子房いひ

十三・11

てこづつた所へ張良笛を出し

二一・19

西原―いろはがるたの「粋は身を喰ふ」の逆をいった例。

室山―同。「四面楚歌」の故事。

岡田―贅。

135 色紙の序そうめん買にやり

入江―「序」はついでと読む。七夕の五色の紙を買いにやるついでにそうめんを買いにや

った。この日冷そうめんを食べる。

客へ出すそうめんきつとかしこまり

三三・23

西原―贅。

並の屏風へハ冷そうめんヲ出し

二九・20

岡田―同。

136 なせてもの娘かならずとなりあり

入江―「生酔」は現代の国語辞典に多くみられる「しんから酔っていない」状態ではない。江戸期のそれは、ぐでんぐでんの泥酔状態。「オレは大丈夫だ。一人で帰れる。送ってくれないでもいい」といつて出たものから、足もとがよくよる。主人が「権助、あとからめつからぬように家までついていけ」と見えかくれに実は送られるのである。

入江―親のすすめる男を「どこが気に入らないのか」ときかれても、「なぜでも」と首を振らぬ娘には必ず近所に好きな男がいる。論語「里仁方四」「徳は孤ならず必ず隣あり」の文句取り。

八木―贅。

らうたけだ娘かならず隣あり

拾四・28

なぜでもとばかり申すと伯母のふみ

天五・桜1

137 めつからぬ様に生酔送られる

岡田―同。

138 労働の娘かならずとなりあり

二〇・30

紀内—賛。酒飲みは面白いもので「大丈夫」という人程あぶない。

西原—賛。生酔は「ナマエイ」。途中でどんなことを仕出かすやら危いことおびたらしい岡田—礎稿で明解。

138 くんひんな文字で反物の書付ケ

入江—「くんびん」は、片意地を意味する江戸語。依怙地、頑固など云うもみな同義。越後屋あたりの格式ぶった「正札附げんきんかねなし」をいうのであろう。

くんびんな事をいふなとそびく也

第三・17

紀内—礎解賛。「反物」から考えても、越後屋以外にはない。

青木—同。書付ケは正札をさすのであろう。

「くんびんな文字」は、意味するところは「現金掛値なし」だから「値引はなりませぬ」ということで、正札の文字までがかたくなに見えるということであろうか。

岡田—越後屋あたりの大商店では、勘定書を書く係も達筆家が立派に書く。

139 又貝を捨て行たと茶屋笑ひ

入江—蛤の貝に入った四ツ目屋ぐすり。この茶屋は出合茶屋。

丸薬の貝がらに残る出合茶屋 一三八・38
能書を拾って笑ふ出合茶屋 天七・十

青木—賛。蛤の貝殻の中の四ツ目屋の薬は長命丸？

岡田—礎稿の通り。

140 家の真ん中に宿札芝居出し

入江—芝居小屋の櫓。正面に劇場の紋、両側に座元の姓名を染めたから宿札といったのである。

橋というで二町おっふさぎ 五三・9

青木—賛。『川柳江戸歌舞伎』に主題句が取められており、その註に「小屋の正面破風の真中には座名を書いた木札が掲げられてある」と。具体的なこととはよくわからないが、芝居櫓の下に掲げた木札を宿札（とまりふ、標札）に見立てた洒落ではなからうか。

岡田—青木説でいいと思う。

141 義貞を娘助成嫁で見る

入江—「娘」と「助成」の間に読点「、」を打てば意味がとりやすい。十一月の顔見世狂言（義貞の出る出演物）を娘で見物したが、春狂言（十郎祐成—曾我物）は嫁になって見たというのである。

顔見世のむすめは曾我に嫁で来る

二〇・36

岡田—顔見世狂言で見合い、この縁談無事に決まり、春狂言は嫁で見る。

142 伊勢屋の花見どこまでも花見也

入江—「伊勢屋」はけちんぼうの代名詞。花なら花つきり、決して遊里などへそれない。清—落語の「長屋の花見」よりひどく、飲食無しであらう。

八木—賛。酒無し。

本性で帰るハげびた花の山

西原—賛。見るだけ。

岡田—同。

143 うんのいゝ嫁はた餅へ袖をかけ

入江—花嫁時代の振袖を解いてつくった袱紗を、姑が死んで四十九日のぼた餅の重箱へかけて配る。彼女の圧制を幸いなことに早くも逃れることができ、いそいそと終戦処理に廻る嫁の足どりが軽い。

袖をちぎって重箱のうへへかけ

安七・九三

八木—賛。礎稿例句と、

袖下を風呂敷にする村のよめ 蕨三・31

とから、留めた振袖のその切り取った袖の下の部分でフクサを作るのであろう。

室山—同。礎稿の「花嫁時代」に「娘時代」とすべきか。八木説重要。

岡田—同。

144 鶏を一つ頼むと聞いていひ

入江—孟嘗君の故事。秦を逃がれる途中函谷関に至ったが、鶏鳴までは通行できない。そこで連の食客の一人に鶏の鳴き声をさせたと、こゝ、辺の鶏がつきつきに声をあげたので、難を逃れることができた。

物真似で鶏いっち用に立ち 五二・36
宵なきをさせて孟嘗君通り 一九・ス2

室山—賛。『史記—孟嘗君伝（一五）』の故事。

岡田—賛。

50年度



同人の部

選考委員

中島生々庵 北川春巢

西尾 栗 菊沢小松園

若本多久志 川村好郎

正本水客 戸田古方

大坂形水 橘高薫風

春の海のたりのたりと汚染され

和歌山市 垂井千寿子

哀しさも女は食べてまぎらわし

大阪市 河野君子

逆いたくて終日ガムを噛んでいる

東京都 増田次章

叱ってるうちにだんだん腹が立ち

大和郡山市 森田カズエ

意気地ない姿で振子止まってる

島根県 錦織文子

留守居の嬉しさ何しよう そんな日も

岡山県 竹内翁童

個性的でんなんと軽くあしらわれ

悔のない汗 千金の夢追わず

米子市 林 瑞枝

花芯をのぞいて花を哀しませ

富田林市 岩田美代

生きてゆく蟻に日向も蔭もなし

神戸市 小浜牧人

ダムの水抱かされて山 腑に落ちず

新宮市 大矢十郎

ひきながらひきながら潮 満たんとす

米子市 八木千代

松江市 中川晃男

竹原市 時 広 一 路
足の向き変えれば向い風となる

今治市 越 智 一 水

すねているように老婆の草むしり

新宮市 川 上 大 輪

手を振ってしまえば過去の人となる

米子市 増 田 竹 馬

其の功を語らず乳房うなだれる

島根県 堀 江 正 朗

陽のぬくみ両手に受けて秋惜しむ

大阪市 小 出 智 子

眉描いて女哀しい性をもつ

松江市 小 林 孤 呂 二

黄金色の秋を信じて離農せず

岸和田市 高 橋 操 子

ちっばけな善意でもよし心満つ

大阪市 本 間 満 津 子

ふるさとの風もなみだを拭いてくれ

大阪市 河 野 君 子

帯しめて炎えるものあり 秋ひそか

堺市 河 股 緑 水

父の椅子座れば父の温み

桜井市 岩 本 雀 踊 子
朝配る少年朝の街が好き

堺市 高 橋 千 万 子

セツト少しくずして私の顔にする

大阪市 不 二 田 一 三 夫

作家の妻 いつも背中へ話しかけ

倉敷市 水 粉 千 翁

つまずいて起きてわが道らしくなり

島根県 錦 織 文 子

美しい夢でありたい距離に居る

富田林市 岩 田 美 代

手袋が霜を掴んで落ちてている

八尾市 香 川 醉 々

幸せがいっぱい老婆熟柿吸う

竹原市 山 内 静 水

走ったら間に合いますと灯を消され

桜井市 岩 本 雀 踊 子

種火だけ残す夫婦の共稼ぎ

倉敷市 稲 田 豊 作

にっばんも禿げて来たよと渡り鳥

大阪市 小 出 智 子

友達が目が同性の目になり

松原市 五十坂ある日ある時ある焦り 玉置重人

堺市 倅せと思えば足りる箸をおく 河股緑水

大阪市 新聞の休み腹立つ活字見ず 大坂形水

藤井寺市 足元を見よとは下り坂のこと 西 いわを

富田林市 紫陽花の心の彩を聞いてみる 岩田美代

西宮市 憧れがとどかぬ虹で美しい 島居百酒

八尾市 身を守る女に鍵は一つです 宮西弥生

富田林市 老いの惑い愛のことばの重み知る 和田維久子

富田林市 こんな時の私が嫌いで顔洗う 岩田美代

富田林市 喋りたくなればとぼとぼ峰歩く 板尾岳人

神戸市 恋人が出来たを花屋知っている 小浜牧人

八尾市 悔むまい明日のページは真白だ 高橋夕花

竹原市 ひとときの天下を取らす夕桜 森井菁居

堺市 ひな人形女ひとりを笑ってる 野坂つき子

大阪市 自分から刺しには来ないバラのとげ 川口弘生

(以上の句は路郎賞候補作品の最終選に残ったものです。同一句は割愛しましたが、以下の点数には入れました。三回の中間発表から二句以上は一句、四句以上は二句、六句以上は三句、編集部選で発表します。同一句は割愛)

富田林市 諦めた心は笑うてばかり居る 岩田美代

常識が出たばかりに失いし
倅せらし声に白髪も生えてない

東京都 屈辱は拇印の指を押さえられ 山根白星

喪章とりながらはんばな午後となる

大阪市 アルバイト今日は共産党へ行く 山川阿茶
きたなさも矛盾も自分と同居する

米子市 八木千代
小さな鐘鳴らし続けて女坂
有料ホーム老女のひとり陶器めく

岸和田市 高橋操子
割り切れぬ心古しと思えども
老人会にはいるに勇氣要ると知る

大阪市 阪上十止庵
明治大正もう花の咲く場所がない

御香奠と書く他人ごとの墨をする

八尾市 香川酔々

大根を干して淋しい道しるべ

造反の蟬 円型の巣を作る

今治市 越智一水

捨てられるとこ捨てて人間丸くなり

太陽をとらえて光る水しぶき

島根県 堀江正朗

台所コツコツ春を刻む音

泣くかわり笑えば笑うこと多し

竹原市 山内静水

社運隆々飼いならされて株をもち

四季の花 花びんに流派などいらす

堺市 高橋千万子

美しい蝶にも過去のある身なり
何事も順番があり串だんご

八尾市 高橋夕花

炎より水のもだえに心ゆれ

倅せを流すに惜しいしまい風呂

貝塚市 野坂つき子

マイペース春のペタルは焦らない

ライバルにされているとは気づかない

岡山市 竹内翁童

赤字だろうなあ親切なバスに乗り

残照の命集める彼岸花

大阪市 河野君子

窓を拭く新春の光を溜めたくて

台所へ立てば安らぐ性を抱く

大阪市 川口弘生

二世も添うつもりを妻に断られ

問われたら答える齢を女持つ

青森市 工藤甲吉

要求がまだ通らない結跣蹴坐

神戸市 小浜牧人

虹が消えたあとに別れがあるばかり

三重県 川上大輪

アイシャドウ泣かぬ女にしてしまひ

大阪市 中川 滋 雀

十枚目のお札は別れの音で読み

大阪市 羽原 静 歩

冷奴もう七人の敵はなし

八尾市 宮西 弥 生

背を向けて子なき夫婦の夜が長い

大阪市 不二田 一三 夫

いたずらっ子のように鉢から新芽出る

倉敷市 小野 克 枝

石地藏わたしも動けないのです

尼崎市 黒川 紫 香

一人ずつ辻を曲った月の道

松原市 谷垣 史 好

真直ぐに煙が上る日の愁い

神戸市 中村 ゆ き を

人の眼に指をつつ込む記事で売り

大阪市 本間 満 津 子

福祉行政手袋片方足袋片方

倉敷市 嘉数 千 代 香

仮面錆びついて個性となる怖さ

竹原市 三宅 不 朽

雪達磨わが影みつめつつ崩れ

新宮市 大矢 十 郎

セン抜いて帯から出ると高くつく

藤井寺市 西 い わ を

行列は崩さず羊歯は列ぶもの

和歌山市 野村 太 茂 津

弛めては見ても絃です弓の性

島根県 堀江 芳 子

夫と掌を重ねて生命確める

竹原市 小島 蘭 幸

ダンプからわざわざ降りて怒らはり

神戸市 仲 どん たく

ワッショイワッショイ米価ガス代交通費

鳥取市 両川 洋 々

妻病んで家中慣れぬ音を立て

竹原市 時 広 一 路

忍従の土間ほの暗き文化財

大和郡山市 森田 カズ エ

寒行の角を曲った音となり

西宮市 島 居 百 酒

満ち足りた酒は素直に脈に溶け

堺市 河 股 緑 水

チンドン屋夫婦に戻る帰りみち

富田林市 和田維久子

包まれて包む心を忘れまじ

大阪市 金井文秋

動いてはせぬかと鬢おちつけず

富田林市 板尾岳人

慾背負い慾捨てに行く山である

大阪市 玉置重人

褒められた分だけ減ったナポレオン

桜井市 岩本雀踊子

もう泣かぬ女になった不仕合せ

京都市 都倉求芽

一坪の庭にも無限の空がある

竹原市 森井菁居

秋になれば砂漠なんでもないところ

大阪市 宮尾あいき

初風呂の肌はまだまだ湯をはしく

倉敷市 稲田豊作

所詮もう銭にならない老の汗

一般の部

(発表順)

豊中市 安藤寿美子

末法の世の新聞をたたみけり

松江市 梅本登美也

鴉の目柘榴割れる日知っている

名古屋市 大林曲ん手

朝の靴働く方へ向けてある

尼崎市 大垣たもつ

建てかえる役所の窓は高くなり

備前市 武内雅堂

工場の橋に暮しの詩がある

出雲市 谷口あきら

腹が立ち拾った石は丸かった

寝屋川市 柴田恵美子

太古から虫は一つの顔で生き

柏原市 小谷葉子

捨てられた日から人形自由です

大洲市 宮尾みのり

一つ齡重ねた昨日と同じ今日

今治市 園部正則

別々の色をさがしている夫婦

順調のように見えても影はでき

松江市 梅本登美也

尼の爪やはり女としてのびる

円満の秘訣のよう鍋煮える

寝屋川市

香川 亜成

はりつめてはりつめて風船われる

豊中市

高橋 古啓

反抗は毛虫の頃の話です

唐津市

岩下 照沖

子燕に野良へ出る手を閉めきれず

島根県

松本文子

屋上の風に聞かせるひとりごと

鳥取市

勝山 紫宏

動かない金魚は冬を思案する

八戸市

島田 昭治

生きること教えてくれた人が辞め

岡山県

白岩 文衛

はにかみは真珠の艶のしたたりが

大和高田市

岸本 豊平次

白杖の先で大地に話しかけ

前衛も松の緑を初春にいけ

大阪市

堀口 欣一

病院長逝去他人の病院で

鈍行はたのし日が落ち月が出る

島根県

谷岡 芳枝

暮思いつめ思いつめ

高知市

古谷 恭一

罐ビール車窓に映る僕がいる

岸和田市

池田 露子

舞う雪が波に抱かれる十勝川

和歌山市

秋月 宏方

老齡年金これが金脈とは淋し

序文・中島生々庵・西尾 栞・野村太茂津諸氏

垂井葵水遺句集

選句・川村好郎・西尾栞・野村太茂津諸氏

送料共・1000円

本社で取り
ついでおります。

・同人吟・

秀句鑑賞

—前月号から—

正本 水客

父と児の対話なぞなぞとは悲し

藤井 一二三

親子の断絶がやかましく言われているときに謎々であっても対話があることは救いである。下五悲しと言いつ切らないことが望ましい。最初にマークしたのは24句であったが、今回は3句組の方から逆にさかのぼって行って紙数の切れた処で打ちきらせて貰った。

朝フット覚めなんだよな死がほしや

河原みのる

近頃ボックリ寺とか言って、ここへお参りすれば苦みもなく往生が出来るとなかなかの人氣であるとか。人生最後の望みであるのかも知れぬ。

引金の手で握手してゲリラ去り

溝口はやを

最近のシージャックの情景などが思ひ出される。表現の適確さがいい。

初盆へ寡夫は飲むより芸がなし

おとこやめは全く芸がない、それだけに哀れさはひとしおである。
これからが人生余生と言うなかれ

増田 竹馬

人間として本当の人生は六十から始まると私は常に思っている。余りの人生なんて、とんでもないことである。

嘘を信じられて心に借りができ

安平次 弘道

ふと何気なく言ってしまった言葉、言わでもの嘘をまともに信じられた善人のとまどいが眼に見える。

子と話すこともないほど嫁に慣れ

八木 千代

仕合せな嫁と姑である、句主の人情が偲ばれて微笑ましい。

嫁だけが僕に相繼打ってくれ

仲 どんたく

これは前句とはすこしムードが違う、利発なお嫁さんの勉めぶりが眼に見える。

民宿へ泊り仏壇まで拝み

嘉数 千代香

通された部屋には都会では見たこともない大きな仏壇が据えてある。つい手を合せておく気分も分るが、それに因ってより良いものてなすを期する密な心が、仏壇までのまでに感じられて鋭い。

氣に入らぬなり善人だと言われ

時 広 一路

善人という言葉には軽い軽蔑やからかいの

意味が住々にしてこめられている。
知事の名を覚えて帰る敬老日

吉野 富江

ギブアンドテイクの見本とも言えるかも。
ピンチ 安生牌がない

柳 楽 鶴丸

3音9音の短詩であるが、独りよがりになることなくパンチがある。

病妻のいつからか死を口にせず

河村 日満

私死ぬんじやないかしらと冗談めかしていた妻が、フツツりと死のことを言わなくなった、切実に自分の病状を悟っている証拠であらう、言葉にならない夫の心情。

地の底の母までとどく冬の雨

高杉 鬼遊

母をおもう心の底に滲み通ってくる冷たい雨である。

私だけが知ってるくせのガスコンロ

錦 織 文子

家事万端ゆきとどいて生活経験もゆたかな女性が思われるが、その底にちよびりユーモアの感じられるのもいい。

縫いあげて袖も通さぬものを溜め

若 柳 潮花

氣に入った色合のものがあれば一枚、友達がこしらえたから一枚と着物に対する執念はすさまじいものがある。普段は洋服で、袖を通す機会もなくタンスの底に眠っているとしても、それはそれでいいのであらう、女性の心を限りなく豊かにして呉れるのであれば。



菊沢小松園選

三重県 川 上 富 子

歩道橋秋は淋しいもののうち

島根県 谷 岡 芳 枝

離婚したらなどと言葉を弄ぶ
身に余る話が壁を抜けてくる

カタツムリ住宅難へ胸を張る

人の死も笑えるドラマにしてしまひ

夕焼けこやけまだ故里へ心置く

香を焚く女 おんなを匂わせる

気短家の懸崖の出来地にとどく

念入りに洗って罪を消そうとす

世渡りの口のうまさを目が拒み

寛大な愛が女を迷わせる

鳥取県 伊 藤 静 枝

大阪府 堀 口 欣 一

つやのある電話の声に年忘れ

一連の珠数これだけが親譲り

宣伝にじわりじわりとつり込まれ

江州米水晶米と銘を打ち

此の本を読もう読もうで秋がたけ

手洗所駅長さんのいいしつけ

子の背丈測った柱を拭きなおよす

評論家東北弁を憚らず

今治市 渡 辺 南 奉

モミアゲを長く秋の山歌を唱い

松江市 本 庄 快 哉

なまけてるのが綱引きの中にいる

夜稼ぐ母と気づいた綴り方

今日終えて明日には悔いのないねがい

刑務所を出るので心配一つふえ

父の引く綱へ長男手を添えず

泥ンこの方が追われているチーム

唐津市 田 中 紫 浪

ボマードの匂いも好きな人のもの

目の合図だけで見分ける秘書の役

順番をジツトコンドル空で待ち
初産の後からタバコ吸い始め
集金で知ったその家の温み

唐津市 岩 下 照 沖

窓硝子息吹きかけて馬鹿と書く
拇印捺す寒き女の吹き溜り
空っぽの回天木馬耳を立て
肩抱かん恋のうずきの射程距離

今治市 真 山 国 彦

一番癪な女房の批判
略字体新かな古典読まさぬ気
天職の誇り父より後に無し
表情の無い看護婦に押し切られ

豊中市 高 橋 古 啓

偽りになるかも知れぬ茜雲
幸せな林檎は四つ割り二つ割り
傷口を見せられてからの痛みよう
一ひら二ひら花卉の愚痴は秋になる

大洲市 宮 尾 み の り

これしきの家、番犬の唸りよう
負けて勝つそれを納得せぬ若さ
切り捨てることのみ多く人嫌い
真ん中で寂しがりやはよく喋り

和歌山市 桑 原 道 夫

猫拾い途中で捨ててきた子供

箸を割る音に野心のない飯場
真夜中になって広場が喋り出す
消沈の肩とも知らず抱きにくる

愛媛県 小 山 悠 泉

盗泉の水は飲まないスラムの灯
肩書きのない気楽さの酒まろし
金利又弱者を泣かす貯金帖
年甲斐もなく赤旗を振る野心

岡山市 船 越 洋 之

渋い茶の向うの男に頼り切り
擦り切れたベルトの穴は太らない
少年の善意が坂を嬉しくし
逃げ出した亀は笑いの内にいる

柏原市 小 谷 葉 子

傷口に沁みる中年多弁となる
かすり傷ほどの恋に生きてます
栗の毬昔を語ろうとはしない
秋に咲く桜をふいと憎くなる

吹田市 藤 原 世 史 春

スト権のためストをするおかしな世
悪役が憎まれすぎたよい芝居
電話機がこんなに光るよい話
ゆでられて蛸の根性固くなり

大阪市 牧 と き を

じつとせぬ炬燵の中の孫の足

年老いてなすこともなし友の顔
ひよろついてつかまる杖のあたたかさ

和歌山市 檜

村 ふみよ

緊張も不安も産声ふき飛ばし

再会を約す電話の声がぬれ

言い足りぬ言葉気になる帰る道

島根県 松

本文子

夕焼けがきれい いい事ありそうな

夕日へ祈ることばの多すぎる

何色を選ぼう秋はもえている

岸和田市 池

田 香珠夫

嫁よりも若い後妻に気を配り

レジャーにも女は城を出たがらず

おキレイと賞める言葉にトゲがある

尼崎市 中

谷 利美

他所目には派手であろうと好きな柄

階段の手摺へ老は争えず

先に手を出した弱身につけこまれ

東大阪市 崎

山 美子

子育てに夢中 おしゃれに遠くいる

どうみても恋をしそうな顔でなし

にが虫も妾宅へ行く顔別にもち

鳥取市 有

田 鹿の子

池の面に月も浮かんで酌み交す

お月さまあなたも私も一人ぼち

墓参り少し明るさ取り戻し

鳥取県 加藤 茶人

妻に詫び子に詫び酔いのベルを押す

雨乞いの台風までも連れた雲

反省会飲んで騒いだけのこと

豊中市 安藤 寿美子

ヒロインにもなれず野次馬にもなれず

ゴキブリよお前空巢を見たんやろ

水たまりそんでも雲を映してる

七尾市 松高 秀峰

好きな酒やめて子供の学資にし

盆栽のように育った子に困り

一言が多い男でよく気付き

尼崎市 小林 文月

義弟二年ぶりにナイゼリアから帰国

ルスの間に孫が二人も増えており

余技のように孫のおむつを換えており

二年ぶりビンボユスリもなつかしく

鳥根県 岩田 三和

天の声地の声をきくうさぎ耳

害虫と一処に益虫までころし

山が見え草屋根がみえ人が見え

富田林市 中村 優

ジングルベル皆んなサンタに化身する

鉢巻を締めたが声も出ぬ社運

ベストセラー読めば日本が疼き出し

河内長野市 井 上 喜 醉

曲線美まだ失なわず二児の母

限界を知ってか静かに花は散り

軽い足新婚我が家へ靴が鳴り

和歌山市 松 原 寿 子

重い腰上げた父親参観日

温めた囁き誰にも触れさせず

温もりを抱いてあと味かみしめる

寝屋川市 柴 田 恵 美 子

秋海棠わたしの涙ためたのか

まだ愛が残ってるから別れます

小気味よく喰べて女は強く生き

大和高田市 岸 本 豊 平 次

若鮎は跳ねてる姿にして焼かれ

背丈二寸ズボンの裾に隠れてる

這えば立て立てば歩んで寄り付かず

八尾市 田 中 紀 美 代

揉めてもおしどり夫婦とまだ言われ

焦点を趣味に合わせれば短い日

好きじゃないタイプばかりに言い寄られ

大阪市 平 井 露 芳

弱ければ弱いで巨人ネタになり

コップの中 嵐は知らず花開く

お年玉一口増える子が生まれ

榎原市 西 本 保 夫

課長より大きくなっていた印鑑

平社員背伸び週休二日制

結局は仕事するボク休まれず

備前市 武 内 雅 堂

不器量を穴のあくほど見つめられ

冷たさを知っているから尾は振らず

公平な社長の朝の咳ばらい 堺市 堀 畑 日 子

借衣装五三の桐の紋ばかり

よい着物教養で着る生きてくる

よろめきの番組はもうあきました

ハンドルと算盤妻に握られる 東大阪市 野 村 白 風

だんだんと辛さがわかるプロの水

ひきかえす勇気もあって明日がある

今治市 伊 藤 一 郎

聞かされてひとの妻の三昧をほめ

銭も無いのが欲求不満

郵貯利子下げた恨みで待つ選挙

今治市 今 井 松 花

子が捨てた鉛筆家計簿書くに足り

老醜を隠す背広を眺める

女房が派手なネクタイ買うて呉れ

八戸市 安 田 紘

洗っても洗っても人生のシミ
活けられぬ定めに草の花開く
代書屋は愚痴も半分聞いて書き

鳥取市 松本永治

裏方の多忙も陛下知らず発ち
奴鳴る父よりは涙の母へ折れ
合理化の都度へ人事課灯が遅い

須賀川市 平栗金太郎

美女と云う見栄で縁談取逃がし
灯を泳ぐ暮らしを賭けたつけ黒子
自慢にはならぬ音痴の親譲り

羽曳野市 麻野幽玄

旅からの便り戸締り火の用心
艶談の出るころ通夜の客も減り
地鎮祭までは伏せとく隠居部屋

松江市 梅本登美也

パトロンが替って店の名も替わり
墓石になつておちつく青みかげ
黒梓へ笑った写真ひきのばし

新潟県 高野不二

恥しいと思わぬ子供にも困り
七人の敵を仲間に見む話
六価クロム昔の人はおとなしい

岸和田市 池田露子

同窓会寸借詐欺にみなかかり

文楽の魅力を青い目に説かれ
親バカが増えてますます塾が増え

鳥取市 勝山紫宏

蠅たたき構えて腕に止まられる
美しい夕陽が明日へかきたてる

今治市 蔦本昌道

銭湯で政府けなして流し合い
苦労性先手先手と気の焦り

島根県 安達潮音

野外での映画 夜風の座が楽し
いやいやに降る雨 遠く遠く鳴り

新見市 吉田落猿

この島に激戦あったとも見えず
十二万年前の氷柱の前に立つ

唐津市 三浦ひろ坊

デパートのチラシ買わなきゃ損のよう
倅せをあげるとCM恩に着せ

倉敷市 高山みどり

千枚漬つい三献を出てしまひ
山の音聞こえてきそう秋の夜は

唐津市 山下勝一

軽口が過ぎて別れてそれっきり
浮草も流れてるうち花が咲き

唐津市 田口虹汀

何もかも秋と云いたい色になり

プリンスと呼ばれる蜂は美しい

唐津市

岩崎

栄

新学期テスト用紙もカラー刷り

まるやかな心育てと満月のぼる

兵庫県

高橋

近江

自家打ちのうどんが冬を連れてくる

総入歯外せば外孫不思議がり

大阪市

内藤

ますえ

浪人一人わが家に夜がなし

徳用と書かずサービス品と書き

和歌山市

西山

幸

再上映共に見た頃思い出す

乗ってからブレーキ利かぬ事を知り

宝塚市

吉田

とんぼ

秋風に割れる小さな花ざくろ

爪立って歩く女の細い眉

寝屋川市

江口

度

食欲の秋チャルメラのよく聞え

秋深し娘が無口になつていく

高槻市

山田

スミ子

おもちゃ屋にケン玉が有りなつかしい

おしぼりの温みに秋を感じさせ

滋賀県

柚木

踏草

抵抗の青春咽喉が渴れてくる

気心も癖も知られて小商人

香煙の直ぐ立つ高さ眺めてる

敬老会不老長寿の顔で寄り

名古屋市

大林

曲ん手

つぎはぎの躡れそれでも子は素直

羽咋市

三宅

ろ亭

旧式な風呂の温くもり唄も出る

鳥取県

福田

保子

反省を促す父も過去を持ち

着飾ったすそを気遣う雨に遇い

鳥取市

岸本

無人

種まいた金の成る木の芽が出ない

自問自答三面鏡が知っていた

八戸市

島田

昭治

不況と知らず見事な菊が咲き

選良と云われし人がつかみ合い

今治市

大本

バット

なんなのさとはなんなのさ睨みつけ

嫁ぐ日が決まり新夫の物も編み

今治市

古野

伶人

あがつてるとわかってても声もどらない

白も黄も有って意外な曼珠沙華

西宮市

朝山

千世子

老いの誇り生涯賭けて菊作る
忘れようと努めてみたが夢に佇ち

島根県 飯 塚 虎 秋

くらし向き変われば変わる風の声
倅せな余生のように見る世間

堺市 栗 本 藤 持

足許のすべるところに魚が棲み
病んで知る歩ける日々のがたさ

弘前市 小山内 貞 男

送金に父の心で筆をとり
青春の暗い思い出カーキ色

大阪市 欄 蘭

一時二時三時も知って居た早寝
打水も今日からケチル水値上げ

大阪市 新 川 貞 祐

扶養義務逃げた子にも行く遺産
空港反対のゴネ屋が空の旅

今治市 原 田 琲 珈 里

口説かれていた気で砂をいじってる
打ち水に老舗らしさを見せる朝

松江市 岡 崎 雪 美

神経痛時節の変り知っている
求人欄どうにもならぬ齢で見る

泉佐野市 大 工 静 子

一汗を芋の葉かげに身をよせる

手加減を気付かず駒をにぎりしめ

姫路市 大 原 葉 香

妻揚枝心の迷い解きほぐし
入れかわり立ちかわり椅子の辛抱

尾崎市 大 垣 た も つ

年末に調整される子をあやし
逢うだけの唯逢うだけの丸じるし

伊丹市 樫 谷 漫 柳

余韻など露ほども無い蛍光灯
おつまみも買い置き妻のクラス会

新宮市 西 尾 功

市場籠看護婦さんも主婦の顔
眠れぬ夜これでよいのか四十坂

橋本市 森 脇 善 彦

夜深く愛に千差の灯が籠り
虫一匹殺さぬ花の短命さ

川西市 野 田 登 代 子

新米が届いて故郷の秋思う
育ち盛り月謝袋がかけて来る

高知市 竹 崎 寛

蚊とり香の渦巻きとなり原爆忌
僕の骨担きあげてくお前は誰

今治市 園 部 正 則

厭いた顔してるのに愚痴またはじめ
教育ママヒステリックに子を叱り

大正と昭和の無理な接続詞
尾鷲市 渡 辺 伊津志

漬けものの石の重さがふと淋し
名古屋市 吉 田 文 枝

悟られぬように自分でしたつもり
大阪市 松 本 甫久路

牛小屋が応接室に近代化
赤穂市 谷 口 赤 童

木の香する窓へ満月招き入れ
唐津市 筒 井 朴 童

物云わぬ赤ちゃん親をこき使い
大阪市 花 田 繁 子

▼前号訂正―谷岡芳枝・飯塚虎秋・安達潮音・堀江連露諸氏の県名は島根県です。

島根県 堀 江 蓮 露
落選のポスター壁でまだ笑い
大阪府 須 浦 つ ね
俄か雨露天の花屋値切られて
諫早市 江 副 二 牛
晩酌の肴に妻の愚痴も聞き
寝屋川市 福 島 隆 子
鈴虫に寝かされ蚊には起こされる
大阪府 村 島 秀 村
敬老の今日はにこにこ起きてくる
尼崎市 駒 村 岳 麓
秋風に風鈴淋しく吹かれてる

難解句について

森 田 布 堂

最近の句の傾向は次第に難解句がふえ内容が判読し難い句がある。読者に自由勝手に判読せよとの無責任な句もある。川柳は元来誰が読んでもすぐに理解出来る句でなければ意味がない。現在短歌も俳句も難解句が多くなつたという。ある古い選者がわざわざ発表誌の句主に手紙を出しどのような意味の句か問うたところ遂に回答が得られなかった事実もある。

難解句を読んでも感銘もなければ共感も得られるはずもないのは当然であり、川柳人口の増加にも影響を与え受けなくなるのではなからうか？短歌俳句にしろ句を的確に理解して欲しいという願いをこめて作られるものであり、それがなければ作句の意味がないと思ふ。

平意な表現に於ても高度な作品は過去に於て少なくない。特に川柳に於ては万人に理解されてこそ意味があるのである。

将来川柳普及にもブレイクがかかり川柳としての魅力を失うような不可解な句が多くなることを憂慮するものである。
いまこそ川柳の原点に立ちかえって考えるべきときではなからうか？



ATLAS

プラス

高級洋菓子・レストラン

本店 洋菓子部 TEL (33) 9974
レストラン TEL (21) 2334

百人一首と川柳

(18)

百士野鞍馬

五七 紫式部

めぐり逢ひて見しやそれともわかぬまに
雲がくれにし夜半のつきかな

この歌は「新古今集」に「早くより童友達に侍りける人の、年ごろ経て行き逢ひたるが、ほのかにて七月十日ごろ、月にきはひて帰り侍りければ」と詞書して載っている。

百首にも源氏一帖式部よみ

如雀(四一三四)

「源氏物語」に「雲がくれ」の巻があるの
で、この歌の文句にかけている。

清少は早起紫女は宵つぱり

よしは(四九二一)

清少納言(六二)のは「鳥の空音」で早朝、
これは「夜半の月」で宵つぱりと洒落てい
る。また赤染衛門(五九)と、京紅、江戸紫
にたとえて、

江戸染も京染も入る百人一首

鳳頭(二八一七)

京染と江戸染百へ月をよみ

錦鳥(三三三七)

京都では衛門江戸では式部なり

文集(三三三四)

紫女赤女虚々実々の物語

乙(二〇三〇)

と詠まれ、赤染の「栄華物語」と「源語」と
も並べられている。

紫式部は、天元元年(九七八)戊寅の生れ
と推定されている。藤原為時の娘で、十九才
の時、父が越前守として赴任したので、一緒
に行ったが、翌年京都へ帰り、兄惟親と共に
居た。それからまた翌年、父の友人で二十も
年上の藤原宣孝と結婚して一女を産んだ。そ
れが賢子、大式三位である。(五八)

結婚三年目、長保三年(一〇〇一)に、夫
宣孝に死別して、賢子と二人で暮らしていた
が、その頃から「源氏物語」を書きはじめた
のである。

寛弘四年(一〇〇七)三十才の時、一条天

皇の中宮上東門院彰子に仕え、「楽府」等を
進講した。寛弘八年、天皇崩御、中宮は皇太
后となられてから下って、なおも文学に勉強
して、病身であったが「源氏物語」を書きつ
づけた。「紫式部日記」は、宮仕えしていた
時の事を記したものである。

長和五年(一〇一六)三十九才でこの世を
去ったが、「源語」の末巻「宇治十帖」は、
死ぬ前の作である。紫式部の呼名は、この物
語に因んでつけられたものらしい。

式部は、幼少から聡明で、広く和漢の学を
おさめ、相当自尊心が強く、文学に打ちこん
だためでもあるうか、平安朝時代の自由恋愛
が盛んな時に、よく二十四才から寡婦でいた
のである。関白道長が思いをよせたが応じな
かったようである。

式部の書いた「源氏物語」は、光源氏とい
う理想的男性を主人公として、その奔放な恋
愛生活を描き、同時にその時代の宮廷や政治
の一般をも写し出した、五十四巻から成る、
わが国画期的の小説であって、世界的の大著
といわれている。その文中に挿入されてある
和歌八百首を見ても、当時非常にすぐれた歌
人でもあった。

その「源氏物語」を書くについて、石山寺
に籠って書いたという伝説がこしらえられ
て、それがまた一般に信じられてもいる。石
山寺の縁起によると、

「村上天皇の皇女大斎院よりある時、上東
門院へ、何か珍らしい物語でもあったら見
させたまへと請われた事があった時、上東

門院は、紫式部に仰せ付けられて、何か物語を書くようにとの御意であつたので、式部は、石山寺に参籠し、観世音に祈願してお告げを蒙り、大般若經の料紙を御本尊より賜わり、須磨明石の巻より書き始めた」といのである。また「河海抄」には、

「八月十五日夜の月が湖水にうつり、心の澄みわたるままに書き出した。」

「行成卿が清書して大斎院へまいらせた」と具体的に書かれてある。そしてその後の、「東海道名所図絵」石山寺の項には、

「源氏間、本堂の傍にあり、昔寛弘の頃、紫式部此寺に籠って、源氏物語を作りし所也。故に源氏の間という」

とあるように、現在でも石山寺には「源氏の間」というのがある。そして式部がそれに使用したという硯もある。

川柳もこれらの伝説によって多く作られている。

紫の硯にうつる秋の月 兩夕(三三三)

石山につくねんとした美しさ (二一)

寺はいりしてもほまれな官女なり 問々(三三三)

大黒のやうに紫式部見え (六四)

紫は石の上にも居た女 (四三)

官女が居ても名の立たぬかたい寺 (四一)

堅い寺見立てて式部かりるなり (二一)

石山も二ヶ月程は紫衣寺也 和番(三三三)

わがうちのやうに式部は明けはだけ (九一)

石山で紫赤い月を見る 梅島(二九二)

順礼びっくり石山に生きた雛 巨眼(六一)

石山の所化衆短冊などねだり 柳舎(三三)

そうして川柳はまた「源氏物語」についても多くの句を見させている。

千金のあかりで式部夜なべなり (二五)

月よりも筆の冴えたる物語 老葉(九一)

物がたり疵のない夜の月で書き 三交(二八)

みなもとは月から浮ぶものがたり 磯川(三九)

石山で眠なくつづる物語り ヤマキ(五三)

いししいをたべて明石へかきかかり (二一)

いししいは団子 十五夜の書きはじめをよみ、

五十四帖は石山百は小倉山 乙(二九)

五十四帖を石山の月にかき 文和(二一)

妄語戒破って五十四帖書き 巨眼(八六)

京染も六十帖は美しく 此糸で綴て六十帖にする (三〇)

此糸で六十帖をつづるなり 寶輪(二六)

六十帖も紙の入る物がたり 青露(四九)

石山で一割引の書物出来 三交(二五)

石山の草紙一わり引けで出し (二二)

一わりは雲にかくれしものがたり (三四)

と、はじめ料紙を六十帖綴って、五十四帖を書いたともいわれている。

ひり出入まづ経文のうらに書き 巨眼(九一)

法花經の裏へ初音の巻を書き 雪堂(二五)

達者にまかせてあらずいを式部書 麗虹(四四)

恋の三代実録は紫女が筆 個(八二)

上品なようで不義物語なり 五桑(コリ三)

桂男の名所から式部書き 駿丸(三七)

明石も須磨も外ならず式部入れ 三松(四一)

石山で須磨や明石の物あんじ 志夕(二八)

比叡おろし源氏四五帖ふきちらし 万仁(四三)

今以て色のかわらぬ物語 如雀(五〇)

石山で出来た書物のやわらかさ

中島生々庵・中島小石 共著

おしどり作家
待望の句画集

『生々楽天』

句は八百句にも及ぶ重量感にあふれ、南画のカラーページはか期待の作品がここに開花する。

来春三月中旬発行。

色事の書籍はかたい所で出来
市東 (三五三二)

箕山 (四一九)

石山で紫女堅くない物を書き

高麗 (一六一二四)

名高さは石でくだけた物語

雨夕 (五七七八)

一二帖まで色文と所化おもい

雨夕 (六二二二)

祭礼の喧嘩も書いた物語

五風 (三一三六)

味迄は書かぬ雨夜の品定め

一徳 (四四四五)

かんじんのうまみは式部書かぬ也

(二五二〇)

夜書いた物語りゆへ夢でとめ

孤雲 (四三三)

簾木があつて塵なき物語
散雲 (五四二)

石山で鼻の赤いも一人書き

車井 (コリ三三〇)

三井の入相に花散里を書き

玉章 (四一二二)

葵から先ッ書きそふなものがたり

雨夕 (五三一)

晴嵐をながめ野分をかきかたり

雨夕 (四四二九)

一帖は螢に光るものがたり

晴川 (四四八)

手習の巻は清書に念が入り

木質 (五六二五)

どく経の側で御法りの巻を書き

鶴丸 (七八二四)

浮橋は五十余帖の行留り

遊高 (六六二)

最後の五十四巻が「夢の浮橋」となっている。実際この大作を書いたのには、凡そ十五年ほどかかっている。はじめの「桐壺」から「乙女」のあたりまで、即ち源氏出生から六条の院に多くの寵姫を集めて、榮華を極めるまでが、最初に出来た部分で、玉鬘の尚侍や女三の宮のことや「空蟬」「夕顔」のような巻は、上東門院へ出仕した後に、おりおり家へ帰って書いたものであった。そして後の十巻は死の前に書いたものである。

石山は女筆指南の元祖なり

女筆にて春の曙秋の月

叶 (九四一七)

と稀代の女文豪をほめてゐる。「春の曙」は清少納言の「枕草子」のことである。

紫式部という呼名は、この「源氏物語」に因んでつけられたのであつて、その前は、姓の藤原をとつて「藤式部」と呼ばれていた。

物語書く頃はまだ藤式部

青露 (五四四二)

藤色を紫にしたものがたり

和里 (六五二)

藤色の紫になる秋の月

留人 (三六三)

紫に湖水で藤の色をあげ

坂人 (五九二九)

藤式部時分は色もまだ薄し

ごまめ (一四〇四)

紫に染らぬ前は藤むすめ

升丸 (二六二五)

藤色を濃く書いてから名を残し

巾布 (四四三三)

などと、それも川柳は詠んでゐる。

頭の文句をとつて
見しやそれともわかぬ間に嫁隠れ (二五二七)
とも作られている。

・水煙抄・

秀句鑑賞

—前月号から—

岡村久志良

うしろからいきなりぼんと肩を叩いて「元氣を出しなさい」と言われたような心地で、水煙抄のゲラを受け取りました。そうだ、少し創ったり、書いたりしなくては。錆びた庖丁をとり出して、料理にかかります。

揺れている女心が活けてある

田中紀美代

私は、こんな思わせぶりの句にひっかかる癖がある。それにしても、この句霧間気がありますね。十月号本欄で、小浜牧人さんが余韻余情のことに触れましたが、この句いかが。彼女の心をこんなにまでゆさぶった憎い男の顔が見たい。

一泊の留守を気にする妻の旅

吉田とんぼ
言葉少ない長男へ氣を使い

山田スミ子

憎かるう筈のない子を叱りつけ

田中三男
ホームバー年上の妻酔いつぶれ
平栗金太郎

どの句もみんな余情切々の句です。一泊の留守にさえこまごまと氣を配るほどのとした妻の味、近頃妙に口数の少くなった長男の顔色から何かを読みとろうとする必死の母心、チャンスと見たら涙を吞んで一発喰らわさねばならぬ父親のやり切れないさ、年上の妻とは新婚時代のこと、中年ともなれば魅力がた落ち、女の酔態は尚更戴けません。若い夫の、索莫とした虚しさが言外に滲じむ。
華麗なる静寂という遺作展

堀口欣一

正に華麗なる挽歌であり、毫華なる弔詩として、清楚なる喪服にも似たたたずまいの句です。いい句ですね。

現実のきびしさ知らぬ産声あげ

小谷清女

「呱呱の声さほど楽しき世にあらず」という丸山弓削平さんの句と同想の秀句ですが、そこは年輪、表現において先輩に一步を譲る。こまごま書いて来て、気づいたことです。が偶然にも、欣一さんの句は死者への華やかな讃歌であるのにひきかえ、清女さんの句は、正に生れ出ようとする生命への苛酷なまでの暗いつぶやきで、その顕著な対照に驚いた次第。本当に偶然にこの二句が並んだのです。

本文で句わせ二伸で念を押し

大林曲ん手

さすが苦勞人と言いたいような社交のテクニクを捉えた見事なスケッチ。
一肌を脱げば責任みなかり

井上喜醉

「善人もここまで来れば馬鹿のうち」などと笑わないで下さい。本人は汗だくで頑張っているのです。尊い存在です。
趣味が金になって目の色まで変り

今井松花

趣味で金が入るとはまことに羨ましい限りですが、本当ですか。その「目の色まで変る」という具象的な表現で、この句生きて跳つていませんか。

根なし草川の流に逆らわず

崎山美子

その昔、岡山に剣花坊の高弟で不天坊という達吟家が、「浮草の流れのままに樋をくぐり」と詠っています。どちらの句も、自分の能力を知って賢い処世術をわきまえた、擬人法の秀句ですね。

では、最後に、近頃少いといく言われるユーモアの句を拾って見ましょう。
どう装って見ても背中が泣いている

川上富子

カビ生えた薬先輩から貰う

江口度

ゴキブリを叩くときにも出る個性

真山国彦

泣き笑い。微笑。いづれも、巧まぬ軽いユーモアが美しいですね。

愛染帖

橘高薫風選

青森市 工藤 甲吉
母帰る橋のこちらへ手を振って
死んだ妻へまだ京呉服から手紙
その中に小鳥の詩いた花も咲き
和歌山市 桑原 道夫
頬杖の高さも定まってきて秋
片眼をあけて恋人に逢いにゆく
尾張市 渡辺伊津志
背信の鏡の裏に子が写り
大衆の怒りへ巡査休業す
大阪市 正本 水客
カラフルな影が女に従いてくる
霧はやく木立に塔が浮きあがる
岡山市 行本みなみ
盗み終った顔にサンガラスなぞ如何
島根県 小砂 白汀
源流の万年雪がソプラノで
なんとなく君なきあすを想うなり
八尾市 高橋 夕花
母の待つ門がしだいに暗くなり
わたしを庇うわたしの言葉撰っている
具塚市 野坂つき子
焼リンゴ好きな女のぐちを聞く

尾張市 香川 醉々
墓石を洗う女の白い指
十二月朔日ゆっくり茶柱立つ
虹かかるのは尼寺の門の外
神戸市 小浜 牧人
ウエッディングマーチで聞くドラマは二幕目
瀬々と時雨れてコーヒー濃く淹れる
神戸市 和田 恭子
あの時も菊が咲いてた嚴父の忌
振り向いてくれる夫は淋しいな
羽曳野市 麻野 幽玄
老いにもう愛の一字が書けぬ文
満ち足りた心を抜ける風を知る
岡山市 白岩 文衛
合鍵を持たない父の靴の音
思い直し太郎冠者また太鼓打つ
大阪市 西出 一栄
名月を拝んで愛でて老夫婦
しだれ萩野仏温う着てござる
柏原市 小谷 葉子
風の中哀しきものよ独裁者
かごめかごめよと泣きたい時唄う
竹原市 三宅 不朽
朱の繭を抱きしめ女人鶴を折り
髪を剃りネクタイをしめ買う造花
名古屋市 吉田 水車
風景絶佳あそこは墓
カンナの朱時効の愛を呼び戻す
興市 横田 英詩
自動シャッターに空しく笑むもひとり旅
和歌山市 野村太茂津
裏切りを小耳に少しうれしいか
松江市 梅本登美也
しとやかな笑顔を啞の娘が見せる
備前市 武内 雅堂
盛りあがる乳房に花野までの距離
小川静観堂
背中まるく腰の巾どうもただの人妻
東京都 山根 白星
愛誦の酔余の父にありしかな
豊中市 高橋 古啓
女坂を蛇悠々と横切りぬ
和歌山市 若宮 武雄
いくつかの胸引裂いて永眠す
柏原市 大峠 可動
蹟いて母の灯火からこぼれ
大阪市 宮尾あいき
日本健在皇后様は美しい
倉敷市 水粉 千翁
寝顔ずらりよるこびという身が細り
島根県 堀江 正朗
宵まつりテレビも止めて二人いる
島根県 堀江 芳子
人形の鼓動ひたひた瞳から
堺市 伏見 茂美
秋冷に重ね着せしは夫のもの
倉吉市 奥谷 弘朗
ことなかれ主義に消された新鮮味
鳥取市 河村 日満
人さし指が不自由な日の箸の性
尾崎市 黒川 紫香
邪魔になるとこで女の立話
高槻市 若柳 潮花
得度式女を捨てて眼をつむり
今治市 月原 宵明
腕切られ悲しくプラタナス黙す
和歌山市 西山 幸
エキストラ悲劇の舞台に駆り出され
松江市 本庄 快哉

不況深刻守衛のいない門くぐる

岡山市

拳から本音が消えていく暮し

大阪市

罇雲に乗ってもみたい自己嫌悪

島根県

老人の日漂い切れぬ明治の血

島根県

雲湧けり夏来にけりと云うが如

滋賀県

家計簿の喜劇と手品妻まかせ

羽咋市

季節の移りへ黙す広告塔の虚無

今治市

四等星以下は見えない町に住み

守口市

ノエ節から秋が涼しくなる

新見市

病室の窓開け放し山車拌む

今治市

壇上に大國旗あり菊薫る

今治市

手を汚し口を汚して熟柿食う

松江市

題材の種はつきないペンゲリヲ

和歌山市

明日香路の秘仏静かに眠る寺

員坂市

新調の服照れながら母は着る

名古屋市

一頃の隆盛名刺が褪せている

船越 洋之

こおろぎが耳に囁く悔一つ

今治市

神夏磯道子

静けさがやっと戻った古都の冬

大坂市

安達 潮音

公園の隅で逢うてる籠の鳥

八尾市

錦織 文子

只で家倅等に貸し従わず

大坂市

柚木 踏草

俺の分まで飲んで逝った父恋し

八戸市

三宅 ろ亭

指定席という番号札がつき

島根県

古野 伶人

今日背き明日背かれる赤い爪

守口市

羽原 静歩

湯上りの肌秋風の淋しさよ

今治市

吉田 落猿

他人の子抱いて眼鏡を掴まれる

今治市

真山 国彦

買い代えて十六時の視野となり

新宮市

伊藤 一郎

停年も間近切札捨てようか

東大坂市

柳楽 鶴丸

妻の手芸はケースの方が高くつき

東大坂市

沢山 福水

出稼ぎの婦心をそそる流れ雲

岸和田市

行天 千代

子を抱いてお通夜に泣きにきた女

岸和田市

大林 曲手

婿殿が車を売った安堵感

高槻市

葛本 昌道

冗談もうかつに言えぬ煙草の輪

出雲市

西川 誓二

白杖をついて聖夜の町角に

西宮市

宮西 弥生

雷雲へぎりぎりまでのクラブ振る

和歌山市

新川 貞祐

離れても通じる心持ち合わせ

小松市

島田 昭治

抗って見ても所詮は空をきり

堺市

鈴木村 颯子

誰も彼も過ぎて戻らぬ時を持ち

島根県

野呂 右近

トンネルを抜けたところに海光る

倉敷市

津田 与史

あけぼのがお好きでしたねご命日

八戸市

大本 バット

妥結して社長音痴の唄が出る

鳥取市

原田 琲珈里

風雪がちがった顔を刻みあげ

大坂市

大矢 十郎

何となくぶらり京都へ路を向け

八尾市

竹中 肖二

色即是空死に損ないのたわ言ぞ

大路 美幸

竹中 綾女

(本社宛へ送稿されると、本社から薫風氏へ転送することになります。ムダな時間を省く意味からも規定はお守りください)

池田 香珠夫

池田 露子

山田 季賛

投句先 〒560 豊中市中桜塚3丁目13

15。橘薫風苑 (一人三句)

善意

亜鈍の謔言（其の四）

藤村青一

この十月で私の団地生活も、まる四年になった。尾道滞在中、句集「白黒記」を上梓したが、その寄贈の殆どが柳人よりも詩人に多くなったのは已むを得ないことである。それだけ詩歴が長く途中で途絶えた時もあったが、旧知の詩人が多く居ただけに私の失明はショックで、失明への反響が多くなされたのは当然ともいえる。四十六年の十月帰阪したときは、盲目詩人というありがたき肩書がついていて、私を知らない若い詩人の出迎えがあり、その詩人の出している雑誌の相談役といった名目でお世話をするようになった。というよりもいろいろと私の方が彼等グループのお世話になった、といった方が本當らしい。それ故に年が明けて約一年間、詩の教室に講師として招かれ、月に一回寝屋川の団地から大阪市内に出掛けることが、何よりも私にとっては生き甲斐であった。私が詩を書かずに川柳の方へ走ったということは、失明以前から詩人仲間では、知る者は知っていただけに、最近の彼等が属する雑誌の随筆では、安心して私の事やその身辺に触れたるることないことを戯画的にカルチュアライズして書いたり、座談会で語ったりしたものだから、二十年近く雲隠れしている私への興味

が、若い詩人達の仲間から勃然として起つてきたもの皮肉な現象である。こんなことも私にとつては、一級身障者への差し出す善意からであると思えば有難いことで、とかくの噂の端ッパに乗せられて私を幸せとつくづく考える。

故安西冬衛の隨筆に「マックの善意」という一語がある。マックは安西が私に好んでつけた愛称である。原因はアイスクリームの紙カップを作っていた時、偶々アイスシャーベツとか、アイスマックの言葉が私の口から飛び出したところを居合せた安西が、これは青一君らしいと私に名付けたものである。マックの善意は、安西にとってみれば滑稽にみえたものらしいが、しかしとりよ様にれば算盤すくめでない私の善意を、純粹に受け止めていたのかも知れない。安西未亡人の私の家族への善意がゆるがせないものであることもこの際伝えておこう。尾道での失明を知って、永い間義肢の冬衛という身障者につかえた経験から、私の家内にあてた様々な思いやりのある手紙、又、帰阪して寝屋川の三井団地に移って早々御訪問をうけたことは、まことに意外といえ意外であった。以来難粗忌がある度にわざわざ訪ねて来られ、今年も何かと相談を受けたが、それは私への見舞を兼ねたもので、今更私としては何の力もないことは承知の上であるが、過去何程の善意をもつてすべきことであるが、過去何程の善意をもつてしたことか、むしろ迷惑のかげっぱなしであった私を、今更反省させられる。

先達て九月号のつけた「亜鈍の謔言其の二」に対する反響が二、三あった中に、蔑乃奥様からお便りを頂戴した。先ず掲載された

あの写真に、蔑乃奥様が前列の女性達に交つていたことを指摘されたが、私としては汗澀にもその記憶がなく、本文に書き洩らしてはた事を改めてお詫びしたいと思う。そのお便りには、「貴方が純情一途の青年であったことは判る。路郎との問題については、私としては、冷静で客観的な立場をとらざるを得なかった」という意味のことが書かれ、八十三才になる蔑乃奥様自身の孤独感を漂わせつつも、失明する私の孤独への優しい思いやりは、焼酎が呑みた独れば呑みなさい。私もこっそり一人呑む時がある。五時半に起きて、朝日の浪曲を聞いている。浪曲も良いものがある」と奥様は云って下さったが、そうした方々に包まれた昨今ではある。尤も身辺に近い日常の世話をする家内や仲の善意の大なることは分っているが、感情的には不本意な事が多く、腹立たしい毎日を送っているとは、なかなか死ぬそうもない。

日本川柳協会への提案

選者有資格論

大路美幸

作句歴四十年、五十年の川柳人は全国に数千人は居るだろう。しかし、一般的に言うところの間にどれだけ川柳は進歩したのだろうか。たしかに毎月私達が目にする各地の句報、柳誌を見ても、熱心に川柳をつくっているさまは、浮ぶ。いかに句をつくべきか、どんな表現がよいかなどと、苦悩しての句の発表であることはよくわかる。だが川柳作句者のこ

のような努力と苦悩が、果して川柳をつくらない人達に、どれだけ理解されているだろうか。

川柳の歴史は長く、それを生き甲斐として生きてきた人達は随分多い。その割に、一般人の認識度は低く、その文学性は、何処に認められていないと思う。この原因は、何処にあるか。曰く、長い狂句時代があったから。曰く、優れた指導者が居なかったから。曰く、作句者の態度がなっとらんから、等々――

しかし、これらのことばの殆んどが他に責任を転嫁せよとするもので、今我々が何を為すべきかについては、少しも触れていない。川柳人相互には、暗黙の了解事項のようなものがある。その一つに、「選者は絶対である、いたずらに批判してはならない」ということがある。勿論その了解の中には、自分が批判の対象になりたくないという願いが込められているのであろう。しかし、あえて言う。「下手な選者も居る」

川柳に限らず、俳句も、短歌も、小説も、毎日変っているはずである。それが進歩か、退歩か知らないが、人類に進化がある限り、必ず動いているはずである。現代の川柳が大組織的に、日本川柳協会が発足し、川柳展望が発刊され、内部的には指導者批判が台頭し、作句表現的には、三要素時代から内面観察時代へ移行しつつある。このような川柳の動きを考えて、選をしているものは果して何人いるだろうか。

川柳は選者が発表するものだと言えよう。現在発表されている川柳の殆んどは、選者というレンズを通して印刷されている。だから、選句が下手であれば、下手な句が発表

されるのは当然である。そして、その選者は、前に書いたような理由で殆んど批判されない。又、川柳評論家なるものは殆んど存在しない。となると、選者は、自由はんぼうでも拾うことが出来るということになる。悪い句。このような弊害をなくするためには、柳歴の延長上に選者をおいたり、いわゆる旦那衆に選者を任せたりしないで、ほんとうに川柳を知り、川柳を愛し、川柳の文学的向上を希うものに、選を任すべきである。

では、そのような選者を選ぶのは誰か。そこでいろいろな議論が出て、大抵の論は日の目を見ない。だから、私は此処に、多少の異論を覚悟しながら、一つの提案をする。日本川柳協会にその選任を一任することである。勿論、日川協に於て、その選任の理由について責任を求めて公表し、毎年の総会に於て承認を求めなければならぬ。そして、数年ごとには有資格選者の実績を比較検討し、選者を無資格にすることも出来るし、新たに、選者有資格者を選任することも出来る。そして、その選者有資格者は、いろいろな発展的権限を与えてもよいと思う。

このようなことは、川柳界混乱のもとになると思われるかも知れない。しかし、川柳が動くものであり、川柳の向上を望むならば、敢えてその混乱があっても止むを得ないと思う。現状では、百年河清を待つよりもひどい。日川協が責任ある有資格選者を選定することによって、現代川柳の意義も略々確定される。現代川柳の位置づけも意されるのではなからうか。何日までも「私の好きな句」を印刷されては、真剣に川柳をつくり、苦悩している者にとって、たまったものではない。

まだまだ言いたい事はある。しかし、それは川柳人自身が考えてくれるだろう。言葉のはしほしを捉えて、ぶちこわさないよう、その主旨に賛同してくれるならば、出来るだけ早急に、討議し、実行して頂きたい。別の方法でもよい。まず、選者の質的向上を図ることによって、一人でも多くの人に川柳の理解を促がし、川柳の文学的基礎を固めることが出来るものと私は信じます。

堺史蹟めぐりの 録音テープ

八木摩太郎

▼史蹟は南宗寺―妙国寺―土佐十一烈士―堺港―堺灯台(日本最古木造灯台)について、人物は与謝野晶子、坂田三吉、河井醉月、村上浪六、曾我廼家五郎、食満南北、貿易家納屋(呂宗助左衛門)―助左衛門、曾呂利新左衛門、ザビエルが来た日比屋了慶らを語る。対談アナは一瀬紀美子さん。この録音テープは各所へ貸与され、声の広報として近くスタートすることになった。

▼堺市出身の小西行長がNHK「日本史探訪」に取り上げ放映取材に参画、この度書籍上梓、また河井醉月の詩碑が建立計画されたので発起人を応諾、堺のため活躍している。▼富柳会が本年で結成二十年になる。その二十年史編纂について、当時の事情追想記事などを11月1日夜、阿部柳太、板垣岳人、藤園花梢、岩田美代のみなさんの来訪をうけ、當時をしのびながら質問に応じた。多くの柳人が富柳会から生まれ育っていった。二十年の星霜に転々感無量だった。

歳暮

高橋千万子選

楽しみは子から好物来る師走
 白い菊活けて新春まつ歳の暮れ
 歳の暮気付けば枇杷の花白し
 お歳暮を選ぶも思案の物価高
 新生活唱え歳暮はみんな受け
 りなかたの歳暮米やら蜜柑やら
 なぞかけたわけでないのに歳暮くる
 選挙戦匂わす歳暮も来る師走
 同類が又顔合せする歳暮
 アルバイト歳暮の山を配達し
 ライバルの歳暮気になる社宅族
 石鹸とわかる歳暮は積んだまま
 贈主の名だけ見ておく歳暮です
 歳暮と歳暮玄関で鉢合せ
 皮肉にも下戸に歳暮のサントリー
 中元も歳暮も無縁飯場暮れ
 猛犬はかくりしておく歳暮時期
 印刷のはがきで歳暮ありがとう
 秋風が吹くと歳暮の内見会
 嗤うまい歳暮に託す親心
 歳暮どき受取印を近う置き
 役どころ考え歳暮の嵩も替え
 特価品どつき買っておく歳暮
 来る筈の歳暮届かず落ちつかず

武雄 里風 宵明 藤持 芳子 洛醉 素身郎 洋々 木魚 敏月 思月 凡九郎 春日 昭治 茶人 晩童 度二 肖二 民の 祥月 紘

歳暮とは法にふれない賄路なり
 歳暮に匂いがあつて重たすぎ
 又しても隣の歳暮預けられ
 歳暮の品が変わつて知る事情
 定年も近く歳暮はやめに
 退職が決まり歳暮もう来ない
 お歳暮の財布をねらう大売出し
 含みある歳暮は豪華な品となり
 歳暮してこの一年をしめくくる
 課長ともなれば名前へ来る歳暮
 飲みぬのに酒ばかりの歳暮くる
 裏口に頼む歳暮の派手な事
 昇進をしたら歳暮もぐんとふえ
 御無沙汰を歳暮で詫げる品を携り
 当然のような顔して歳暮うけ
 エビタイの心算の歳暮行きつきり
 歳暮の効果もあつて係長
 歳暮の洋酒リボンをつけてくる

南奉 千翁 重人 優朗 弘一 好史 与子 道子 軒太楼 登美也 一郎 綾女 正則 漫柳 七面山 福水

先客もお歳暮らしい応接間
 慎重に剝がして歳暮お嫁入り
 お師匠はん歳暮の山に隠れそう
 高価なる歳暮の裏を推理する
 重みある歳暮かるがる受取られ

人 昌道 近江 竹馬 右近 カズエ どんたく

お歳暮が疎遠にそつと橋をかけ
 口にこそ出さぬが歳暮こころ待ち
 集まった歳暮それぞれドラマ持ち

軸 天 地 保夫 一風

納め

高橋鬼焼選

お歳暮の格差をなじる孫の口
 この辺で納めてやるか妥協案
 結納の今日吉日を四角張り
 好きな娘へ納めた胸の鼓動聞く
 納まらぬ意地が仕事の虫になる
 目録を納めて愛が揺れはじめ
 見納めと思つた村へウターン
 永代経を納め石段広く見え
 前納の会費へ万障繰りあわせ
 税金を納める札はしわのまま
 除夜の鐘とにかく年の納めにし
 税金を納めた音で靴が鳴る
 見納めの波止場の風は十二月
 一言に納められないとげがあり
 気がかりなものは納めて春仕度
 一年分ボンと納めてやる気なり
 納税を果して馬鹿のように寝る
 飲み納め飲み初めとなる百八つ
 仕事納め納めきれいにぬぐつとき
 開発へ見納めとなる山の秋
 ヤングにはヤング同士の納め式
 仕事納めした日真昼の酒に酔い
 納め過ぎ役所有難とうとも言わず
 めめ飾りつけてクレインを下りてくる

軒太楼 里風 茶人 道子 優彦 魚山 道子 不二 道夫 漫柳 祥月 本蔭棒 右近 白水 どんたく 素身郎 紘生 豊々 信二

働いた汗で納める子の月謝 役所です御用納めの文字が生き
 除夜の鐘今年納める音で鳴り
 夕焼へ洗車納める明日遠出
 夏のお札を言うて納める扇風機
 所得税納めるほどに稼きたい
 納めに行った筈が油をかけて来る
 納まらぬ心のうさへ石をける
 スタンプの音物足らぬ納税日
 税金を奇麗に納めている笑顔
 商魂を納める世辭を忘れない
 拳骨で納め逆らう目に出合い
 手を締めて納めた筈の埋れ火か
 哀歎を納める十二月せわし
 仕事納め日本の空をとり戻す
 納まらぬ怒へ髪が呼吸する
 見納めの笑顔へ思い出が痛い
 古里へ納めたはずの過去にふれ
 プリンス
 吉岡 遙 児 選
 プリンスも怒鳴りつけたい時もある 一 風

プリンスを返上したい時があり
 プリンスは自分で物を買いたがり
 プリンスに庶民の自由羨まれ
 青春をプリンスの名に縛られる
 偶像にすぎぬプリンス担がれる
 プリンスのロマン庶民に親しまれ
 プリンスの恋みのらずに帰国され
 プリンスの恋はアイドルめいている
 プリンスの恋がみのった軽井沢
 プリンスとくも似合いのプリンセス
 プリンスは御多忙デニスの腕が落ち
 不惑過ぎては皇太子という気楽
 王様が元氣プリンスの儘老花
 プリンスに神代からなる血が流れ
 プリンスに歴史の重さのしかり
 中世の服でプリンス現われる
 プリンスのズボンが少し野暮たい
 プリンスは衆目のピンとはずれず
 本当のプリンス何もしやべらない
 プリンスは子供の旗へ手で答え
 伸び伸びとわが家のプリンスよく育ち
 我が家のプリンスただ今つまみぐい
 プリンスは月の砂漠の話だけ
 プリンスにカルメンみたいなのが欲しい
 プリンスの真実王位捨てて生き
 プリンスとプリンス悩み語り合い
 老松の御手植えプリンスだった頃
 プリンスという歌手体ごとと歌う
 プリンスにある夜巷の灯が紅い
 秒単位でプリンでプリンス古都を訪い
 与史
 いわを
 白水
 どんく
 甫久路
 昌道
 伶人
 保夫
 国彦
 曉風
 素身郎
 武雄
 漫柳
 登美也
 軒太楼
 バット
 照二
 信魚
 木山
 七面山
 藤持
 芳子
 度
 隆子
 重人
 好一
 凡九郎
 本蔭棒
 洋々

プリンスのミスを親衛隊かばい 秀 峰
 佳
 無いくらししてもプリンス羨ます 正 則
 プリンスの微笑のがさめカメラアイ 重 人
 プリンスも商魂たくましく産油国 右 近
 プリンスはデノミネーションなど知らず 代 仕 男
 人
 プリンスと生年月日同じだけ 暁 童
 地
 プリンスのとまとい給うハプニング 可 住
 天
 プリンスに賭けて腹帯しめ直し 千 翁
 軸
 プリンスともつかず撰政ともつかず
 投句にお便りに
 川 柳 塔 柳 箋
 一冊百円 送料七十円
 初心者歓迎
 短期速成
 費用低廉
 内容充実
 入 会 随 時
 (規則書呈上)
 大阪市南区大宝寺仲之町一丁目
 誓得寺内 関西奇術教室
 電話大阪〇六〇七二二八

男手の繕い物の木綿糸
 (男手の繕い糸にあなどられ)
 奴唄糸を切る気か力み舞う
 家建てた祖母の形見の糸繰機
 久し振る祖母糸のような目で迎え
 かせ糸を巻いている手に亡母の詩
 見学へ機織る人の無表情
 人形へ心が通う糸さばき
 踏んばったはずどこかで糸の音
 しつけ糸とれぬ形見のさびしすぎ
 一人者案内器用に糸通す
 妻の座を七色の糸で編んで嫁く
 (よく出来た。この調子だ)

同 岳 同 紫 同 信 同 文 同 洋
 麓 宏 ヨ 二 美 子 子

針と糸だけで生きぬく未亡人
 仕上りを楽しみながら糸運ぶ
 糸みみず溝から抜ける夢を見る
 妻の座から糸伸してる引いている
 人生を心のまゆの糸で織る
 目に見えぬ糸に引かれて墓参する
 毛糸編む手を止めたメロドラマ
 もつれ糸廻り道して和を保ち
 手応えの惜しいところで糸が切れ
 この人も音痴と知つた三味の糸
 糸目つけぬ選挙資金の底が見え
 あやつりの糸のまにまに踊らされ
 上手に使い糸切歯の色気かな

繁 子 静 泉 同 次 同 寿 同 利 同 瓢 同 静
 子 え 泉 次 子 美 太 観 堂

母の裾はいつも糸屑がついていた
 糸巻に借りた子の手が高うつき
 糸たぐる影にんまりとほくそ笑む
 糸口を常識という手でつかみ
 もつれ合う糸をはぐせば愛一つ
 糸車廻して観光明治村
 釣りの糸に全神経が吸い取られ
 糸道がつきそめ三味の心知る
 題一帯一十二月二十日締切 (二月号発表)
 宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四
 千七一一 本 田 恵 二 朗

・ 近 作 ・

今 治 市 月 原 宵 明

明日に迫る約手秋陽は釣瓶落ち

エリート一滴すらも無し

日本の器用はピンとかんげ燃り

花街のさびれ撓蛸自嘲する

大 洲 市 米 沢 曉 明

使い捨てそうよ歌手にもあてはまり

夜ほ長いキャデールの妻の腰を揉む

流れ作業人を吸いこむビルの朝

岐 阜 市 市 川 鱈 魚

彼岸花死んだ話をくり返す

東 京 都 池 口 吞 歩

青年のお辞儀きれいに非を認め

悪い癖とどめを刺しておく言葉

嬉れしさがそのまま母の言葉数

借りて来た猫になつてる応接間

十年の知己 柳友の初対面

今度いつ逢える心に残る人

動物園に飼われて怠けものとなり

はかりごとあつて煙草の火を借りる

孝行の名儀で食いのばしに帰郷

いい人じゃないかと母が先に惚れ

口止めをすればその日のうちに知れ

今 治 市 長 野 文 庫

大萬川柳

「靴ペラ」

入選発表

選者 川村好郎
 投句総数 五百七句
 入選 六十二句

靴ペラを握って逢瀬ねだられる

大阪 一馬

不恰好な足だと靴ペラ思つてる

藤井寺 吸江

昼と夜の顔を知つて靴すべり

富田林 維久子

靴ペラを添えて下足の行き届き

神戸 牧人

帰しとない靴ペラが拗ねている

大阪 好一

定年の靴ペラ御苦勞様でした

鳥取 冬翁

耳打ちをされて嬉しい靴すべり

松原 重人

妬心押しかくして渡す靴すべり

大阪 柳志

ゴム長のくらしに靴ペラ用がない

宝塚 静馬

仲人の勞へ靴ペラ捧げられ

倉敷 梁水

釘差して靴ペラが出す給料日

堺 一二三

靴ペラにこれから先を訊く思い

鳥取 豊生

職制の順に靴ペラリレーされ

今治 宵明

靴ペラを使う陛下をついぞ見ず

鳥取 日満

よれよれの靴へ靴ペラ差し出され

笠岡 忠三

靴ペラへチップが利いたなと思ひ

今治 昌道

靴ペラで今日稼ぐ足すべらせる

松江 晃男

強がつて見せる靴ペラ酔うている

和歌山 道夫

靴ペラがりレレで団体吐き出され

豊屋川 小路

サービスの仕上げに靴ペラ持つて

大阪 一栄

待ち

大阪 一栄

この鍵の秘密靴ペラ知つてゐる

和歌山 幸

靴ペラも使わず不機嫌の客が去に

奈良 保夫

皆勤の足靴ペラに励まされ

堺 天笑

靴ペラを出す妻が居て早よ帰り

和歌山 与史

靴ペラが働く焦りたしなめる

和歌山 太茂津

靴ペラはサイズ無くても用が足り

大阪 蘭

出世せぬ男やと靴ペラも思ひ

西宮 多久志

靴ペラの要らない靴で往診用

大阪 弘生

靴ペラの悲哀小銭と同居する

大田 軒太楼

来るのではなかった冷たい靴すべり

富田林 美代

靴ペラに今朝の妥協を見透され

倉敷 里風

子沢山靴ペラハイはひと昔

大阪 繁子

靴ペラを慌てさせてる資金繰り

大阪 繁子

靴ペラを使い二人を過去にする

橋本 木魚

靴ペラを客へ差し出すタイミング

鳥取 洋々

靴ペラも素直心も晴れる朝

大洲 曉明

営業所

阿倍野店

堺店

住吉店

平野店

都島店

今福店

十三店

九条店

八尾店

良いよい

月賦百貨店

credit system



丸越

本社 大阪市阿倍野筋3-15-1
 TEL 632-3806・3807

靴ベラも週休二日でおひまです

神戸 静 泉

和解した顔で靴ベラ渡す朝

再起する日の靴ベラに湧く力

靴ベラをしっかりと夜勤の手が握る

靴ベラに甘い絆を見守られ

貝塚 つき子

佳句

行先の嘘を聞いてる靴すべり

貝塚 つき子

遅刻するなと靴ベラにせかさかる

大阪 文 秋

靴すべりもおおきにもない宿出る

鳥取 日 満

ふんぎりのついた靴ベラよう滑り

堺 天 突

靴ベラが待っているのにまだ喋り

大阪 弘 生

人ノ句

靴ベラ代りにされて名刺は捨てられる

宝塚 静 馬

地ノ句

靴ベラを返えしほられたなと思

堺屋川 小 路

天ノ句

脇役として靴ベラは耐えている

倉敷 梁 水

逆者 吟

靴屋やつと靴ベラだけを負けてく

昭和五十年度

ベストテン (十月現在)

花 梢

二五、五 富田林

一三三

美 幸

二五、八 尾

四 住

小 路

一八、五 豊屋川

六 子

つ 子

一八、〇 貝塚

七 好

一八、〇 大阪

八 水

一七、〇 倉敷

九 弥

生

一六、五 八 尾

一〇 多

久 志

一五、〇 堺

一 美

代

一四、五 富田林

二 美

子

一四、〇 尼崎

三 利

美

一四、〇 神戸

四 静

泉

一四、〇 大阪

五 柳

志

一四、〇 藤井寺

六 吸

江

一四、〇 神戸

七 牧

人

一四、〇 藤井寺

八 緑

水

一三、五 堺

九 柳

宏 子

一三、〇 大阪

一〇 洋

々

一三、〇 鳥取

一一 宵

明

一三、〇 今治

一二 文

秋

一五、〇 大阪

一三 翁

童

一五、〇 四 山

一四 維

久 子

一五、〇 富田林

一五 あ

い 子

一〇、〇 大阪

一六 以下 略

昭和五十一年度第一回

「酔う」五句以内

締切 十二月二十五日

第二回

「倅 せ」五句以内

締切 一月二十五日

投句先

〒593 堺市堀上緑町一ノ三ノ七

藤井一二三 大萬川柳係

★

大萬川柳会の会則

一、本会は川柳に興味を持たれる

全国の同好者に広く呼びかけ、

その技その覇を競い、柳界の向

上発展と柳人相互の親睦を図る

をもって目的とします。

二、毎月の出題並びに選は川村好

郎が担当し、投句は一人五句以

内、用紙は官製ハガキ。選句は

公平を期し、到着順に一句毎に

句箋に清記し、無記名のまゝ一

連番号を付記し、順次混ぜ変え

て選者に渡し、選句をします。

三、毎月二十五日締切、出題及び

入選発表は毎号の川柳塔誌上に

掲載されます。

四、左記の採点法により月々の得

点を加算し順位を定め、毎月の

ベストテンを発表します。同点

の場合はその月の投句先着順と

します。天位四点、地位三点、

人位二点、佳句一、五点、平拔

き一点。

五、毎年十二月締切分から翌十一

月締切分までを一年度として、

年度間の総合点の成績により順

位を定め、年度ベストテン把持

者に賞品を贈呈し、大会の選者

に推薦、懇親宴に招待す。なお

ベストテン第一位には特に梅里

賞をもって表彰する。

六、本会の大会は毎年二月に開催

します。本会の会費及び投句料

は不要。但し大会の会費等は別

に定める。

七、投句その他の連絡先は大萬川

柳係へ。

夢のハワイ観光

日米交歓川柳大会

日時 昭和51年1月21日(水)から

1月26日(月)まで5泊6日

会場変更 カイマナホテル

兼題

「判断」

「レイ」

「波乗り」

「観光」

「番組」

「懸け」

柳界展覧

(原稿締切毎月末)

目詩人藤村青一氏(高鷲重鈍)の長兄藤村雅光氏などのことにふれ、または路郎・水府先生の青年時代のエピソードなど川柳家にもたのしい読みものがつづいて

大森風来子氏(川柳岡山社・ますかつと主幹)の句碑が来春4月、岡山市吉備津神社境内に建立。句碑建立委員に本社同人本田恵二朗、岡村久志良、嘉数千代香さんらの名が見える。一口千円、募金締切は12月末日。送金先〒700岡山市津島東四丁目18H三三四〇

寝屋川市立市民会館で11月6日、市教委主催「老人教室」で高鷲重鈍氏が「川柳の由来」を、川村好郎氏が「川柳雑話」と題して講演、盛会だった。

風来子句碑建設委員会宛振替口座岡山八二八番。句集吉備団子第26集原稿募集・自選10句・12月10日締切・参加費千円・原稿送り先(前と同じ)川柳岡山社内吉備団子編集局。

高木夢二郎先生遺句集「面影」が八尾市北本町二の六の一〇(青嵐荘内)古川鶴声方から発行。序文に渡辺尺幾、大石鶴子、三室天翠諸氏。

富士野鞍馬氏(東京都)から11月3日は中島先生と同席、いろいろ語りました。4日フジテレビで「老人の性」を講話、好評でした。

高木夢二郎先生遺句集「面影」が八尾市北本町二の六の一〇(青嵐荘内)古川鶴声方から発行。序文に渡辺尺幾、大石鶴子、三室天翠諸氏。

50年度兵庫県文化祭第3回県民川柳大会の一端は小さい手にあしたを握りしめて寝る。室田千尋。

日本川柳協会の英文呼称及略称決定。
Nippon Senryu Kyokai (N・S・K)

備北新聞の仲田多香史氏が「僕の先輩と知己」と言

日川協コーナー
日本川柳協会の英文呼称及略称決定。
Nippon Senryu Kyokai (N・S・K)

川柳大会及講演会に日川協常任理事が招請をうける場合、費用一切負担願うこと。お祝に際するときは祝電のみ。人員の指名は依頼者側で自由と内規決定した。

日川協50年度総会が京都「かんばし」京都で12月7日開かれるが、本社からは生々庵主幹と栗副主幹が出席される。(参加歓迎)

尼縁之助氏(出雲市)から「本年の島根県文芸公募川柳は五百人、俳・歌を上回りました。」島根県川柳協会の第一回総会を11月9日の表彰式後に開くことにしました。

林野魁光氏(広島市)の愛嬢が11月1日東京で結婚される。と横田英詩氏からお便りをいただく。

八木摩太郎氏(堺市)は堺の史蹟めぐりの録音テープへ協力され、五年前のNHKのふるさとの歌まつりと共に永久保存される由。

伊藤茶弘氏(小松市)は石川県能美郡辰口温泉の総合福祉センター落成記念辰口川柳大会の(11月23日)兼題選者として出席。

与するところ顕著なるものあり……と、東大阪市文化連盟から表彰された。清水一保氏(鳥取県)から「恒例の山陰川柳大会は公民館長、区長会長などの公務上の多忙に追われ見送りました。」一命有る限りと梢に柿熟れる。一保。

垂井葵水遺句集刊行記念句会が11月8日文化会館で開催。全出席者に粗供養として千寿子未亡人から句集をおくられた。

岡村久志良氏(岡山県)が持つていくグライダーが飛行事故を起こし、運輸省からしごかれたり、人権擁護委員として人権問題で徹夜をしたり、こんなとこでシャワヤですと。

小幡里風氏(倉敷市)は胃潰瘍手術のため倉敷中央病院へ9月30日入院されたが11月2日退院、おめでとうございます。

山田季賛氏(高槻市)は昭和50年度・第27回大阪文化祭川柳大会

どこにもない味

ヒロタ
シュークリーム
HIROTA

10月27日大阪鉄道病院内科三四一号へ再入院、ご全快を祈ります。
宮尾あいきさん(大阪市)が住む生野区の私設市場が10月29日早晩全焼。あいきさんは身一つで避難、無事ではあったが家財一切失わ

昭和50年度・第27回大阪文化祭川柳大会
席願 「つじつま」
人妻になるつじつまが置いてある
席題 「空 間」
空間のどこへ自分を嵌めようか
席題 「地下鉄」
菊沢小松園選
前田英美代
堀江としを選
西田柳宏子
亀山 恭太選

れた。多くの柳友が心ばかりの見舞を持ちより、あいささんを感激させた。

▼本田恵二朗氏(倉敷市)から一同市文化祭協賛鷺羽川柳大会の寄せ書き拝受。
▼藤井明朗氏(島根県)から「梅本登美也氏の川柳塔賞準優秀作受賞賀句会」の寄せ書き拝受。



▼旅 信△

梅鈴庵不酔氏(姫路市)から「台北へ二泊三日の旅です」が年令の悲哀をつくづく感じました。一年のこと云うなお前も年をとる。不酔氏。▼羽原静歩氏(大阪市)から「黒部へ来ています」寝つかれぬ瀬の音ばかり悔いとなる。静歩。

▼岡崎祥月氏(松江市)から秋芳洞鐘乳洞を観覧したさが山口の誇る洞は日本一でした。維新のふるさと日本一の鐘乳洞。祥月氏。▼笠原吸江氏(大阪市)東北方面へ来ています。紅葉と樹木を一目で見せてくれ。吸江。

▼市場没食子氏(大阪市)10月5、6日は身延山。富士五湖、18、21日まで十和田湖へカネ女ご夫妻と遊ばれた。

▼各地の句会△

▼第10回岡山県川柳大会(主催・白百合川柳会)昭和51年1月18日(日)午前8時。会場は邑久郡邑久町尾張邑久町中央公民館(国鉄赤穂線邑久駅下車徒歩五分)兼題と選者「白百合」中島生々庵・寺尾俊平・鈍行・大森風来子・橋高薫夢「十年」延永忠美・榎本聡夢「血」丸山弓削平・時実新子「鑑」定金冬二・光岡早苗。各題、各選者二句、但し同一句を禁ず。席題当日二題発表。席題、久志良杯取り切り。岡村久志良選。柳詩本田恵二朗。投句規定。用紙3センチ・8センチ用紙裏面姓号明記・投句料20円切手10枚封入。締

切51年1月15日必着。投句先。邑久郡邑久町真徳、嘉数千代香宛(会費五百円、参加賞・ラッキークイ賞・全員発表誌呈。星賞、総合十位まで、トロフィー。二十位まで、賞品。

▼菜の花句会。12月10日。夕6時。会場は西郷会館(八尾神社境内)。近鉄大阪線八尾下車歩一分。兼題・義理・炎・一枚・助け。席題なし(各題5句以内)句会終了後、忘年会(有志場所)なる。会費千五百円。▼堺川柳会。12月13日会場は八木摩太郎宅。兼題・儲ける・鎖・追加・夜。

▼南大阪川柳会。12月20日午後6時。会場は松崎町大萬。兼題・配慮・例外・クシャミ・混む。

▼川柳東大阪。12月24日午後6時。会場は東大阪市中央公民館二階視聴覚室。兼題・賭ける・振り子・ぎりぎり・テーマ・席題二題(当日発表)。

▼高杉鬼塚氏(八尾市)の母堂ヨネさん(七八歳)が天寿を全うされ11月14日逝去、十五日自宅で告別式。柳友多数の参列に各地から弔電しきり。合掌。

地下鉄を出て太陽をたしかめる
兼題「娘」
頼もしく親をからかう娘に育ち
兼題「野性」
美しい野性キリンの首にある
兼題「ファン」
ファンへの笑顔は幕の降りるまで
兼題「壁」
ひとの死の脆さへ壁は遺される
兼題「近頃のニュースから」
おことばへ香華が揺らぐ原爆碑
兼題「ねばる」
焼け跡で粘った妻がいる強味
兼題「橋」
ちいさなとむらいが行く吊橋ゆれる
(有信新之助報)

米沢 菊沢小松園
後田たかみ 俊夫選
破竹選 加賀
森中恵美子 久保田以兆選
久保田寿海 橋高
蕨風選 滝井 竹光
反省選 広瀬
柏原幻四郎 岸田万彩郎選
梅原 憲祐
伊藤 静夢選
森中恵美子 (有信新之助報)

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券をお贈りするのにも心にくい贈物かと存じます

一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

高島屋
大阪・なんば
東京・四
京都・

本社十一月句会

会場 文化会館

七日 午後六時

宣伝の方法では軽く百名を越せたであろうが、時間的に後手にまわってしまったようである。千寿子さんから全出席者に遺句集を粗供養として、また紀州みかんもともにおくられた。(竹原から静水氏も出席された)野村太茂津氏の介添えで垂井千寿子さんが「垂井葵水遺句集刊行記念句会」へ謝意をのべられた。

川村好郎氏の柳話はすでにプロ級である。故人の人となりや、遺句集の出来栄などを讃えられたが、スペースがなく割愛。月間賞は和歌山の内芝としよんが獲得、恩師葵水氏の霊にむくいられた。(宮尾あいささんの類焼見舞「柳愛の箱」が人目を引いた)進行・西田柳宏子・記録・高杉鬼遊・出席 古方・武雄・太茂津・きみ・福水・道夫・与志・千寿子・としよ・与呂志・蘭・漫柳・正彰・喜美子・十郎・維久・柳志・鎮彦・凡九郎・一三夫・作二郎・喜風・千万子・静歩・寿美子・文秋・好一・滋雀・迷路・喜一・大輪・三十四・勝晴・花梢・静馬・吸江・右近・葛城・夕花・肖二・綾女・柳宏・眉水・醉升・鶴生・敏・鬼遊・古啓・天笑・美幸・静水・幸生・百酒・生々庵・葵・一舟・恒明・儀一・史好・度・一二三・岳人

・牧人・醉々・君子・雀踊子・十止庵・修史
・瓢太・庸佑・好郎・弥生・小松園・薫風・
川狂子・葉子

座題「とぼける」 墨作二郎選

とぼける女にムチは不用なり
おとぼけのおとぼけでない太郎冠者
女六十とぼけるとても板につき
とぼけると素直に去っていく女
言いつけても地球は自転している夫婦
言いつけても返事もとぼけている夫婦
首相登壇一味違つとぼけよう
風呂の湯がぬるくて鳥とぼけない
だまし舟折つてくるトボケタ影法師
うそ発見器とぼけた顔がいじらしい
楽に死ねそうにもとぼけている時計
待ち合わせそうにもとぼけている時計
すこしとぼけて風船糸が切れ
ふところに鍵を隠してとぼけている
賢い奴がとぼけるから怖わい
廻り椅子とぼけるコッも知っている
哭きた来た故郷はとぼけた貌のまま
おとぼけの中に小さな眼がとぼけ
殺氣立つ猿山ボスだけがとぼけ
口惜しさをとぼけてみせているヒロ
そのひとの影はとぼけたりしない
尻尾出たままとぼけている漫画
ボールペンかすれたこととぼけた書
心斎橋で会うたをうまくとぼけたる
よく見えるのに黒いめがねをかける
寝とぼけた耳へ祝砲ぶつ放す
お月さんが見てるのとぼけて見せようか
とぼけている顔が百円踏んでいる
すこしとぼけてリング射る矢はもっている

席題「二次会」

川上 大輪選

割り勘とわかり二次会そつと抜け
二次会の幹事は別に決めてある
二次会が妻のあくびがふと浮かぶ
二次会がなけりや己が売り込めず
二次会の肴に上司こきおろす
二次会へ抵抗する胃を持ち歩く
二次会になると音痴の歌も聞ける
二次会へ下戸がこの代付いてくる
二次会は謎めく女といた噂
二次会にほんたつもの風わがご先着
二次会でほんたの悪友に見えてくる
二次会で張り切つたのが出社せず
アライの折詰二次会に置き忘れ
二次会へ幹事決つて行き
二次会へ行くつわもの選に洩れ
二次会の会費はちゃんと持っている
二次会へこっそり抜けていた二人
二次会ではんと気持さぐり出し
恐妻の二次会そわそわするばかり
二次会の帰りに軽犯罪法おかし
二次会へ釘さされたままついていく
二次会までなんとなまかついて
二次会に不義理重ねて世帯じみ
どうせ二次会と妻は先にねる
言い足らんこと二次会でみな喋り
二次会へ話の詰めを持ってくる
新婚やかい二次会さそてみる
二次会のおとを女が知りたがり
二次会へひなな独身の顔でいる

兼題「みかん」

大矢 十郎選

だんらんの一時家族でみかんむく 祥月

子沢山みかんは数の方を選び
みかんの皮ばかり残して去んだ客
見られてるから一袋ずつ食うみかん
家族的優遇食後に出るみかん
近況を添えて紀州のみかん来る
この辺はみかんで建てた家ばかり
安いというてみかんばかり食べられず
可能性を途中でいまだ青みかん
向き合うてみかんの話紀勢線
みかん狩大人はみかん摸るうまさ
紀の国へ嫁いでみかん摸るうまさ
朗報はすっぱいみかんほしい嫁
みかんむく手つきいっしに母に似る
みかん狩爪を黄色くして帰る
ひとり旅みかん一つでうちとけ
紀の国へ嫁いでミカン選り好み
茲当分みかんが匂う市場籠
味見して甘いみかんは夫にあげ
微熱つづく子供にみかんむいてやり
みかんだけ値下りおかずにはならず
又みかん赤うなつたがまだ嫁けず
夏みかん母となる日を意識する
甘いから半分くれる娘のみかん
熱のある舌の渴きへみかん剥く
お茶代りみかんすすめるみかん処
山盛りのみかん炬燵に母の留守
暖房車でみかん一つに救われる
みかん売るなまりに産地という匂い
摘果するみかんに今年のくらしかけ
ふるさとを捨ててもみかん国の味
話もつてみかんに手も触れず
腐らせると知らず陽の恵み
みかん剥く手は収獲の汗知らず
柔肌のみかんへむごい爪を立て
割るように剥いて紀州はみかんどこ

芳子 漫柳 喜久 維久 勝馬 道夫 静志 千寿 蘭子 富子 福水 右近 綾女 好郎 雀踊 一子 牧舟 一子 寿美 君子 正子 醉々 小松 大輪 葛城 弘生

出来すぎのみかん捨ててを子が見てる
出世したみかんは餅を尻に敷き

兼題「新聞」

野村太茂津還

新聞の社説が大臣めつた斬る
余生作にま朝・新聞に起される
無造作に新聞包みで呉れた松茸
新聞に出ることもなく世を終り
新聞の人生欄に教えられ
放浪の果新聞にまるく寝る
三木の果新聞にまるく寝る
朝刊を開く脳味噌空に包み
新聞山買つての指名犯かも知れない
新聞少年夢をかけてる母の白い息
新聞に無いつた朝父の大あくご
警官のあて逃げ四段ぬきで出る
新聞記事半分義まされくも読み
新聞の裏読まされくも満員車
毎日買った朝日にせよと旅
新聞に昨日の嘘が少しある
新聞のコラム訓示のネタにする
新聞へそつと包んで里の母
新聞のその日の貌にだまされる
新聞記事の死角で泣いている家族
新聞の社説急所を突いてくる
嫌な日の新聞嫌なことばかり
艶文の連載新聞駅で買ひ
新聞に載った趣味から凝り始め
赤旗を押し売りされる地位に
殺人に善意が負けた社会面
朝刊では強気夕刊で落選す
その政府たければ新聞出来上
新聞をしき自由席ねてしまひ
大そうじ古新聞でお茶を飲み

度郎 十郎 登美也 正栄 藤栄 季賛 醉々 度郎 雀踊 千子 鎮彦 吸江 美幸 静馬 夕花 大輪 武歩 福志 日満 好郎 凡九 維子 喜一

新聞の値上げ一行で決る
新聞休刊日一日ばけている
まぎらわす孤独夕刊買いに出る
新聞で寸借をして今日の知恵
インテリヤから新聞を信じない
朝刊の放言夕刊で謝罪する
新聞の無い日コンマが点けにくい
スクープがヒューマニズムをふにじり
うちの人平でよ新聞見せに来る
二三行載つたよ新聞見せに来る
故郷の味転げ出た古新聞
穴埋めに小さく載っている善意
真実を伝えるそんな嘘もあり
網棚の新聞集める役もあり
真実を歪める新聞記事である
黄昏れの背を新聞で叩かれる
善人の死は新聞の隅で寝る
殺し方三面記事に書いてある
病床へ今日は読ませぬ記事があり

三十四 道夫 好古 弘生 多志 維久 右近 好郎 滋雀 肖幸 美遊 鬼人生 岳久志

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 3452114
夜間 06 44018

新聞でやっと見つけた小さい善 大茂津

兼題「スポーツ」

西田柳宏子選

金の要るスポーツばかりやりたり、父と子の對話がなごむ早慶戦、スポーツをこよなく愛しやせているスポーツの秋じいちゃんも白ズック川柳を頭のスポーツ帰りの薄化粧若いマスのスポーツとしての励み、スポーツでもしなはれ出、腹叩かれるスポーツのつもりで仕事する若きスポーツへファイトぶつている平和、スポーツで自信をつけた老父達者ドラマよりスポーツ好きで老母元気、スポーツの秋からちっくり切った答るスポーツの頃から走り出し、もてそうだから野球さんに入りなわ飛びを続ける妻は又肥える、スポーツを満喫もち国交再開し、スポーツウツ着ると背骨が伸びてる、スポーツの不得手な父でそれ歩け、スポーツ紙の一面だけで事がすみ、スポーツは何でもいいでピリばかり合宿の隅の遺影に励まされ、静脈のうきで足で振るクラブ男臭いスポーツマンのそこが好き、男臭いスポーツの喜び知った車椅子迷わずスポーツ評論聞く寿司屋、スポーツ欄まず起ばけに目を通し埋れを抱いてます見合に歯がこぼれキャプテンが謝りに行く草野球

富満子
久志
多日
登美也
芳子
藤榮
滋笑
武雄
維久
静馬
牧呂志
恒明
庸佑
敏々
正彰
鬼遊
醉一
度三
度夫
静茂
十郎
眉幸
水幸

蘭眉美眉十靜太度一醉喜鬼正醉敏庸度恒与牧静雜武天滋藤一芳登多日富
茂三
水幸水郎步津夫升一遊彰々佑明志人馬子雄笑雀持榮子也志満子

スポーツ欄開けて朝刊は……とかれ
出来もせぬスポーツ勝手な批評を
棒高飛びの影にタオルが掛けてある
アスファルトアベ走った跡がある
スポーツは苦手扁平足だから
スポーツを見る眼に欲が賭けてある
秒針の中にスポーツマンの裏腹があ
パリンピク腕遅いし車椅子
スポーツできたえ清貧できたえ
ママさんバレーしばし夫もも忘れ
九回の裏を知って、スポーツマン
一秒のカバが破れず、日が暮れる
スポーツマンシップに遠くいるデスク

兼題「粹人」

西尾

柳千美大生道幸正与醉作百正
宏万幸輪庵夫生彰史々郎酒彰
子子幸輪庵夫生彰史々郎酒彰

蛇とかげ粹人が買って食べた野暮れ
粹人の妻は、一字だけ「蛇」を
下町を歩いた粹人に記され、
歌を詠み絵を描き家督継ぎませぬ
粹人の出番は二次会果てるころ
妻の瞳に粹人フツンと扱われ
粹人もてめ奴にはキザに見え
停退後粹人画廊のくらし立てて
もて余す粹人は女の勝負分け
粹人の助言は親をあてさせ
粹人の妻入籍して居らず
家政婦の過去が聞きたい粹人ひと
粹人と言われ五十をまだ独身
ヤボ用に出る粹人の夏羽織
粹人に調和もつれた古寺の庭
グループに粹人が居る和やかさ
粹人は紙幣を数えたりしない
老古学の教授で酔えば粋きない
粹人の妻ヤボテンに甘んじる

多一史肖喜雀一好維花十正文幸幸古古一芳正
久三
志夫好二風子夫郎子梢郎彰秋生生啓啓榮子朗

琴瑟

杜に訪えば粹人廻り椅子にゐる
真打ちは粹人艶実話する
粹人のスボンサーが居て波立たず
粹人の足袋汚れてた新世界
傾いた家の粹人写経する
粹人の傘にななめの雨がたり
三三回通つて粹人ぶりがたり
黄昏れを行く粹人の孤高めき
粹人ぶる政治家の五七五
お茶漬で粹人と言う箸をおく
粹人にされて金だらけさわされ
粹人の触れられたくない過去があり
法科出の子を粹人は煙たがり
粹人の案外野暮な妻と住み
登山靴ぬげば角帯似合う夫
落柿舎の床机に粹人腰おろす
十二月の粹人奇人物語
一件落着接吹雪の名奉行
粹人の妻は不粹で押し通し
本当の粹人だった人間味
粹人の小指夕陽に透き通る
粹人の何で儲けてはるんやら
粹人が質屋に入るのを見かけ
粹人の折目のかめ札が飛び
なまじつかに粹人ぶつてたかられる
粹人の白袋意地を持っている
俗物とこで別れるひとり旅
粹人の昔ばなしに悔がなし
粹人と言われ随筆家として知られ
粹人の筆端溪の墨にのり
後指さされ粹人満足し
粹人は粹人の姿気に入らず
花も実もある粹人のさばけよう
(河井庸佑整理)

句と「聴診器」

送料共 千円

思い出を燃やして過去をたちきる気

燃えた日もあつた日なたの老夫婦

燃えぬま別れる公園雨上り

残り火を囲み雑談だけが燃え

市場籠目玉玉と店廻り

細腕に家族が重い市場籠

市場籠下積になつての特価品

奥様は社交亭主は市場籠

お守りがたより無事故の年づく

通させぬ畔に燃え立つ彼岸花

川柳さやま

河原みの報

ふるりの文化伝える老人会

老人会表彰されて腰が伸び

新築のガイドは嫁にまかせとこ

選挙戦い声のはず元ガイド

客筋へぐとくだけで来たガイド

長男の嫁にはガイド遠すぎる

百姓はさせない嫁が切り回し

むつかしい条件つきの受話器おく

無条件三十年の傷癒えず

くい違う条件黙し八時間

ほんとうの愛条件を消してゆく

夢さめて布団が重たしだけの朝

手織木綿ふとん被るだけ故郷の夜

病人の抵抗ふとん被るだけ

本当の妾を知っている布団
小銭入れ空になつたらほつとかれ
和歌山七面句会
留守のように音も動きもない旧家
十字架を背負う二人のめぐり合い
市役所の窓で二人の新戸籍
留守用のむ隣も留守の秋日和り
胸算たコンピュータは使われず
バストライン見事で本物疑われ
一寸した留守を逃がした金儲け
お隣りも女二人であと生ます
東の間もお二人でない両陛下
岐路いたび二人で明日へかけた虹
二人連れみな満ち足りた顔で下り
背の子を降してつなぐ親子の手
男なら胸を叩いて引受ける
留守居して特別番組一人占め
富士桜高見の胸にぶつかる
胸の傷ふれぬ言葉の思いやり
聞きたくもない胸中を明される
川柳わかやま

喜美代
とも子
三幸報
武雄
富子
佐知子
和美
幸也
勇次
太茂津
品子
凡夫
其夕
光治
豊吉
利明
三幸

太茂津報

憔悴の影を落した重い靴
逆境へ影がひとつになる夫婦
面影を抱いて待つてゐるベルの音
民族の哀話囁く里の風
囁きのいつか本音の淵に落ち
囁いて見たが本心いそぎれ
恋多き女で凛と男舞い
琴線に触れる囁き待つ乙女
我が影も邪魔になります恋の道
地下鉄の闇が囁きかけてくる

囁いてくれた言葉に賭けてみる
娘ら帰る息づく島の盆おどり
子の影がだんだん先をゆく安堵
愛人のようにメガネを持ち歩き
耐えぬいた涙拭いての帰り道
都会の死角にサングラス消えて行く
老眼鏡思慮分別のある光り
月明り若い二人の影法師
月淡く二ツの影が連れ合い
ジルバからタンゴに変わるころは冷め
川柳東大阪
竹中 宵二報

幸
きみ
武雄
富江
千寿子
与史
那智子
喜智司
太茂津
柳安子
誓二
雀踊子
古方
十止庵
凡九郎
文秋
儀一
綾女
喜風
鎮彦
肖二
好一
正京
君子
一栄
度

南大阪川柳会

金井

文秋報

美幸

もういから人間らしい父である

眉書にもろい世相に席がない

過去を妬く夫婦であつて平和なり

氣を引いて見る氣で過去を打ちあける

あの人が一番よかつた過去となる

出土品つなげば過去をしゃべり出す

過去は過去土の赤さは今も赤

過去を云う男で既にふけている

かくまつてやろう僕にもあつた過去

仮免許必要以上に徐行する

娘と行けば徐行して来て乗れと云う

叩かれりやすぐ死ぬハエがすぐ戻り

月傾き地蔵の微笑濃ゆくなる

金持の耳が傾く儲け口

別れおしむ人へ徐行の靈柩車

徐行運転うしろに父母をのせている

徐行してます生命保険かけてます

徐行どころか僕精一杯に走ってます

徐行したまんま停年まで走る

一言がその人生の糧となり

柳塔まつえ

孫の目にくるいなかつた貝拾う

秘めごとに春夏秋冬海が鳴る

苦しみを埋めて小さい実を結ぶ

愚痴ばかりつらつらとサロンパス

庭石のつづやう方へ芽がのびる

海はよし和むカメの唄を聞く

月光白し孫と神話で更ける縁

読経のさ中にすすり泣く喪服

娘には娘の云い分があり夏休み

文秋報

美幸

滋雀

与呂志

文秋

千万子

君子

古方

肖二

好一

水京

あいき

一舟

酔々

鬼遊

綾女

十止庵

雀踊子

凡九郎

柳宏子

鎮彦

祥月報

虎秋

鈴子

芳子

正朗

登美也

松月

早苗

澄水

過激派の親の氣持ちで子を想い

千恵子抄孤高の人の愛のうた

泡の意地にくめて波紋を立てて消え

鐵泡の川にくだける月がある

女歌手おんな女を強調し

我が夢は山より高くひそと積む

物価高と不況赤鬼と青鬼

毒舌がそうで廻転椅子まわし

貧しくも縁台を置く庭があり

北方領土還すどころか觀光地

団体が派手に乗り込む古城秋

俸せが踏む靴音にこだまする

五体歩調合わせ健康の旗を振る

川柳大阪

うわべだけ何もなかったように暮れ

珠数もった妻に若さがまだ残り

珠数くりの念仏極楽顔並ぶ

雪解けが冬の重さを流し去り

ドレちだがあいつ株では通らしい

糸通す珠数玉老眼もうとく

故郷の新居の虫も同居する

美人かなブスカな傘の中の人

前進へ退ぶ役目を買って出る

ホステスの今日は逃げた客もつき

夏やせでバンドの位置がまた狂い

積年の流れに磐石角が取れ

信心に凝っててちぎれそうな珠数

ホステスは女の強味フルに出し

珠数の艶どうかこの灯を消すなかれ

はしたなく珠数に背いた朝を悔い

軒太樓

雪美

千代

英子

酔夢

晴月

鶴丸

孤呂二

与根一

通児

晃男

町紅

祥月

兒島与呂志報

甫久路

孤舟

吞歩利

凡々

眉水

武松

本蔭棒

季賀

雅菓

洛醉

道醉

漁人

重人

胡蝶

笑風

參觀日ホステス母の地位で出る

云い過ぎた言葉をそっと探してる

南海電鉄川柳会(大阪市) 辻

不快指数忘れていますばらしい口

寡婦の身で今日も重荷に挑戦す

制服のステューアードスにあこがれる

制服の父どう見ても平社員

くたびれた制服停年近くなり

支給されるので制服ももろて置く

制服に補導されてる家出人

親の夢見せずに背広の学士証

着る事のない軍服が捨て切れず

制服となつて誘惑よせつけず

恋に悩むほのおを隠すセーラ服

制服の時はやっぱり標準語

制服のままでお昼のランデブー

佳句地10選(前月号から)

森井 菁居 選

ちっけな幸石けんの香をたたむ

ボンツなりぞ嘘もテライもない僕で

活造りついさっきまで泳がされ

被爆者の日記は白い血で綴る

川に重荷かけぬ明日へのペタル踏む

川の水見ながら別れ話する

膝叩き乍らヒントが通じない

天皇の帽子に親近感がある

夜のキャンプ曇の味を知らされる

家一つ建てて人生たそがれる

喜美代

凡九郎

秀峰

与呂志

圭水報

圭水

忠吾朗

肖二

十止庵

昌女

凡九郎

綾女

正彰

儀一

維久子

川狂子

小松園

鎮彦

喜美代

凡九郎

鬼遊

のぼら

きみ

形水

緑の助

牧人

凡夫

鴨平

制服がコインロッカーで主を待ち
制服の汚れをはこる職に生き
妥協せぬ男制服さつと脱ぎ
制服を着れる身分をうらやまれ
飲みにくく日は制服を着ておらず

城北明朗句会 川口

寝顔つくづく性善説を信じよう
無理な願いを書くと絵馬ひとり言
寝敷してちよっぴり明日の幸を待つ
値上げ続き魔法の杖がほしくなる
重文も値がみをせねば気がすまず
願い事叶うて恐い気も少し
幼稚園もう東大を狙っている
涼しさを味方に半袖値切られる
盛坂の念力ほしい目が欲しい
寝不足も苦にはならない趣味があり
レモン絞り買ってレモンの価にびっくり
訃報来る朝は茶柱たったのに
体裁に余裕ありそにしただけさ
箸おけば寝ころんでる老い見つけ
初登校色の黒いのを自慢する
洗濯は女の命のつきるまで
ほとばしりを冷ます仮寝の傷うずく
良き人のほとばしりいつ迄もぬくい
寝言まで煩い妻の更年期
ハワイウイロー社 市岡
負けて勝つ勝つ心になれぬ負け嫌い
成功するどてらい奴は負け嫌い
負け嫌い足腰ついてよう行かず
一運託生数ある中の負け嫌い
喧嘩まで買って出たがる負け嫌い

弘生報

柳 信
宏 子
千 万 子
季 賛
摩 天 郎
太 茂 津
誓 二
智 子
百 酒
満 津 子
牧 人
美 幸
芳 子
柳 信
つ ね
つ ね
三 十 四
三 十 四
秀 村
繁 子
三 十 四
弘 生
太 茂 津
晚 舟 報
稠 雄
秀 山
紅 漢
快 夢 起
公 女

一分間の柳論

大 矢 十 郎

俳句を作り初めて四、五年になるという近所の知名人とバスに同席した時である。句会の帰りだというその人が私に、川柳もいいけれど俳句をやってみませんかと言ひ出した。私にはとても難しいから出来そうにありませんと答えるに、いや本当に難しいですよ、今日も半数近く没になりましたがね、運者からあなたの句はまるで川柳だ、と言われまし。どうしても私の句は川柳になってしまふ

俳句を作り初めて四、五年になるという近所の知名人とバスに同席した時である。句会の帰りだというその人が私に、川柳もいいけれど俳句をやってみませんかと言ひ出した。私にはとても難しいから出来そうにありませんと答えるに、いや本当に難しいですよ、今日も半数近く没になりましたがね、運者からあなたの句はまるで川柳だ、と言われまし。どうしても私の句は川柳になってしまふ

現代川柳をより多く普及して、一般の認識を高める事への責任を痛感する。

駒つなぎ句会

岸 南柳報

負け嫌いだ多数決で封じられ
男前下げてでもネクタイ派手にする
負け嫌いだ東大試験受けたがり
負け嫌いだ無理に道理を引つ込ませ
歯きしりて手の駒盤に投げつける
黒をでも白と云い張る負け嫌いだ
負け嫌いだ追えば追う程裏目が出
負け嫌いだぶつ云いつつ茶碗酒
負け嫌いだ家建て妻得て丸く生き
負け嫌いだこまで自己を欺く気
ど根性日本人の負け嫌いだ
ライバルの高より少し寄付はずみ
負け嫌いだの虚を突いて寄付はずみ
一言の詫言が云えない負け嫌いだ
まだ若い者には負けぬ銀を持ち
義理故に負けておいたと負け嫌いだ

万里歩
晚 舟
小 雪
草 海
蒼 蛇 棲
エスコ
彩 珉
河 舟
一 つ 葉
峰 円
北 海
風 影
カ 石 女
雪 女

取れていたボタン一つが縁となり
釘つけ夜なべの母はもういない
はずれてるボタン気付かずいる紳士
邪魔になるボタンもあつた四畳半
背りげなく背のびして見る女風呂
背りげなく買ったよかったマイホーム
停年で無駄な背伸びをやったとしり
意地のある男背伸びをして見せる
小心の背伸びは高が知れたもの
背のびした積りはないが金足らず
借りた利子かさむ背びのマイホーム
背伸びせぬ変りにひげをつけてみる
背伸びして熟柿にふれただけの人
秀才に育てる背伸びが角がたち

小 路
抵 風
南 柳
茂 子
石 捨
正 彰
潔 園
儀 一
綾 女
肖 二
鎮 彦
は や
多 津
宏 子



お
ち
あ
い

落 合 思 月

雅号ぶつちやけばなし

し
げ
つ

(145)

大正十一年秋本名で、金沢の新聞へ投句して居たが、十二年一月安川久流美先生から、思月の号を頂き、大正川柳きやり小樽の水原など十数社へ投句、一時は仕事も手につかない位い熱を上げました。結婚の時も酒煙草は、のまないから川柳だけは、自由にやらしてくれと念を押し、お互にその誓を現在も守っております。川柳に定年がないと、勝手な理屈を付けて五十年つづけておりますが、今だに会心の句は私の分身のように思っています。拙い句でも自分の句は私の分身のように思っています。今後も作句に精進したいと思っております。三年後の金婚式記念に、活字になった一万余句から、句集を出版、柳友に無料配布したいと念願して準備しております。

会社員

明治三十六年三月二十七日生

背伸びする女の嘘はゆれてゐる
石の門背伸びをすれば吠えつかれ
背伸びすりやする程世間が狭くなる
代理今日一日だけの背のびする
教養が背伸びしてゐるうる覚え
三井が丘川柳会 高田 博泉報
砂読み之余生をなんとか生かしたい
新入生腕巻をして友を呼ぶ
時計から開放された日のごろ寝
振子が揺れる死から生から死
幸福の時計よ動かずいておくれ
十二時が鳴り十二時のめしを食う
篤農の柱時計にある歴史
ゴシップもしよせんコップの中のゴミ
我が道を行くから噂気にならず

柳 信
摩太郎
善 信
小松園
美松園
博泉報
草 生
博 泉
垂 成
清 水
鬼 遊
メ 女
二 松
て まり

選挙選舌に迷うて棄権する
迷いに迷い迷い抜いて五十すぎ
別の際の迷いはいつも言葉
迷いにも断を下したコップ酒
つまずいた拍子に迷い消えていた
人生は迷い続けて終りなり
廃村の噂しきりにダムのこと
川一つ越えて噂が倍になり
座禅する時刻は灰の落ちる音
虹川柳俱樂部(唐津市) 新岡回天子報
利根川に森繁調の枯すすき
名月と芒が秋を組み立てる
長距離の一番びりに拍手湧き
十五夜も天女は住まらず丸いだけ
朧朗と謡う古城に満月の沍え

世 山
亜也子
博 文
吟 風
度 子
正 歩
静 人
牧 方
古 方
五 木
照 沖
実 坊
広 竜
朴 竜

松が枝に十五夜の月一休み
満月ふらりふらり二次会夜も更け
囚のないみくじを引いている笑顔
大將が関白抑えて家平和
芒野に無常の鐘が吸い込まれ
満月がすすきがおも風景画
示談屋が割り込み事故は太くなり
鶴は糸の有るを知りつつ魚を追
耐えている証拠は拳握りしめ
川柳たけはら 森井 著居報
恋愛もようせず見合も受付けず
しばらくはお墓と対話してお盆
言い訳ばかりしての暑い日が続く
幸か不幸か曲る道がなし
お互いに明日を信じて譲り合い
手離してピエロになれるよがある
百姓の真似ごと無害のナス・トマト
夾竹桃紅はヒロシマ血の色か
生き甲斐のひとつ売れない句を綴り
日焼けした夫たのもしる思い
平泳ぎうきがあるから出来ちゃうわ
ジーンズにTシャツ若い旅つづく
見上げれば西に明日呼ぶ雲の色
地球儀が小さな夢を嘲笑う
うっかりと吐いた言葉へ寝つかれず
傷心をはぐす一人の旅つづく
アクシオンが好き姿よくデリカシイ
僕はにんげん裸で生れ土に帰す
詩こころ愛とは何か辞書を繰る
追憶をトランクにつめ旅に出る
さようなら女に風がほしい街

一 竿
岩 光
松 浦
烟 中
勝 隆
久 男
三 男
虹 汀
回 天
静 水
房 幸
蘭 子
文 晴
スミ子
不 朽
凡 女
峰 泉
菁 居
そのみ
愛 美
千代光
紫 路
一 子
かつ子
眞 子
酉 合
の ばら
英 詩
光 子
鬼 遊

募集

二月号発表 (12月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
水煙抄 (10句) 菊沢小松園 選
愛染帖 (3句) 橘高薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「婚」 礼 小林 由多香 選
「寒」 波 小林 孤呂二 選
「閏」 年 浜野 奇童 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は横書で新かなづかいにしてください。

三月号発表 (1月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
水煙抄 (10句) 菊沢小松園 選
愛染帖 (3句) 橘高薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「白」 酒 竹中綾女 選
「耳」 仲 どんたく 選
「電」 氣 福田丁路 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

締切はお守りください

本社十二月句会

日時 十二月八日 (月) 午後六時
会場 大阪府中小企業文化会館 (二階二十一号室)
天王寺区上汐町五丁目二番地・地下鉄谷町九丁目下車南三百米・電話七七一四〇九六

兼題 「柳」 話
「串」 若 本 多 久 志
「肝っ玉」 香 川 醉 々 選
「傾く」 児 島 与 呂 志 選
「織る」 岩 本 雀 踊 子 選
正 本 水 客 選
各題三句以内厳守

席題 二題 当日発表
会費 三百円
★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20

川 柳 塔 社

1月の兼題 「坂」 「初日の出」
「菫」 「羽根」



たのしさひろがる お買物



阪急

大阪梅田本店
千里阪急
神戸三宮支店
東京大井町
数寄屋橋阪急
京都営業所
ロースタイルズ阪急

定価 三百円 (送料十六円)

半年分 千八百五十円 (送料共)
一年分 三千六百円 (送料共)

昭和五十年十一月二十五日印刷
昭和五十年十二月一日発行

編集 中島蓬太郎
発行 藤原童心社
印刷 藤原童心社

郵便番号 542
大阪府南区鰻谷中之町二〇番地
発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一・三三八五番
振替口座 大阪・三三三八八番

・ペンペン草・

師走

★京都の南座は歌舞伎の顔見世、大阪の川柳塔は秀句の顔見世。と世間サマから云われるようになりたいもの。

千日前の自由軒

★心斎橋と目と鼻の千日前なのにメックに行くことがない。「ガーデン・ロード」だなんてベンなナマエのついた「とんぼり」へはちよいちよい足を伸ばすのだが、一度行ってみたいと思

お役だてください

アリナミンA 

効能＝肉体的疲労時・妊娠授乳期・病中病後のビタミンB₁補給。脚気。神経痛・筋肉痛・腰痛・肩こりの緩和。

☆食後すぐおのみください。☆25ミリ錠。

いながらも、千日前の「自由軒」へなかなか行く機会がなかった。火災で有名になった千日デパートの南がわ（国際シネマの西隣り）にハヤシライスとカレーライスで売ってこんだ「自由軒」がある。大阪出身作家の若いころは一度はここで腹ごしらえをしたもので、その著書にも「自由軒」の名をよく見受けることである。ぼくは去る日、五十数年ぶり、そのハヤシライスとカレーライスを食べにいった。二十五銭だったか、ものが三百円になっていたが、鰻井などよりはグンと安い。

▼葉子コーナー▲

★店内にこの奥さんらしい年輩の女性がいた。五十以上なら、千日前の「自由軒」へなかなか行く機会がなかった。火災で有名になった千日デパートの南がわ（国際シネマの西隣り）にハヤシライスとカレーライスで売ってこんだ「自由軒」がある。大阪出身作家の若いころは一度はここで腹ごしらえをしたもので、その著書にも「自由軒」の名をよく見受けることである。ぼくは去る日、五十数年ぶり、そのハヤシライスとカレーライスを食べにいった。二十五銭だったか、ものが三百円になっていたが、鰻井などよりはグンと安い。

年前の話をしたら、その頃の店内の模様などが一致した。どうやらこの人、この家付きの娘さんらしく、ということとは自由軒の主人は義子かな？。一よい昔の話をされる方がちよいちよいお見えになります」とのことである。

★ぼくの少年時代、市電の回数券が十七枚綴りで一円だった。つまり月8回、映画を見に行っていたわけである。みな早熟で、東京の「大日活」誌の主幹は二十歳だった。大阪の松葉屋総ハガキ店の坂上勝芳氏は十七歳で「煙都シネマ」の主幹だった。（当時、寄席の花月の横に店があった）話が横道に外れたが、外国映画の帰りは西洋料理の「自由軒」邦画の帰りは親子井、寄席や芝居の帰りに「いづち屋」の鰻井が決まりであった。（最近、ボルノ映画の帰りは串カツと、内容がゲンと落ちてきた。）★秋田実先生にはちよいちよいめずらしいものを食通走になる。先生のまた食通家で、その道の会長もされているが、先日梅田新道のグリル・セレクトでテキ

〈川柳塔の歌〉を募集

明るく楽しく、どこでもうたえるわたしたちの歌をお寄せください。

入選作の作曲は専門家に委嘱します。三番ぐらにおまともください。入選作一名に一万円、佳作三名に千円宛。締切は51年2月末日。（著作権は川柳塔社に属します）送り先は本社「川柳塔の歌」係。

をいいただいたことだ、大根おろしで食べる風味はこれまた最高で、機会があればまた一人で来るつもりだったが、その支払い金高をそつと盗み見して、ここはぼくなんかの来る店ではないことと知った。先生は、麦めしとろろ汁のうまい店や、コーヒーにハンにうどんにすしに、とにかく名店街地図のような方だから、ぼくも、めん類はここ、コーヒーはあの店、すしはあそこと、ぼくの行ける範囲のところは今も行かせてもらっている。漫才の会合の場合、梅田地下の台湾料理「竜潭」への予約係りはぼくになっていて、放送、新聞関係、芸能人、作家という顔ぶれだが、ここは歌つたり踊つたりはしないので無芸人食のぼくには最高の集いである。こんな忘年会

11月の常任理事会

▼会計報告「川柳ハワイの旅」川柳塔の歌の公募（右端参照）のほかに葵水さんの遺句集を11月句会に租供養として出席者におくりましたとのこと、など議題が多い。そこへ10月29日の早晩「宮尾あいさきさんが類焼の難に遭い、身一つで避難されたことを柳安子氏から小松國氏に（南大阪川柳会会長）報告、その善処方を理事会で計かることになり、句会場に「柳愛の箱」を置き、あいさきさんを激励することになった。」出席者「多久志・静馬・柳志・栗・薫風・形水・太茂津・一三夫諸氏。」★よい年をお迎えくださいませ。

（不二田一三夫）

製造・販売サントリー株式会社

(サントリー謹製)

上等の夜を約束する
上等のワイン。

金曜日はワインを買う日。



サントリーシャドウリオン

〈赤・白〉1,500円 ● 中瓶 800円

昭和五十二年十一月二十九日印刷
第三種郵便物認可
（毎月一日発行）
（毎月一日発行）

川柳塔

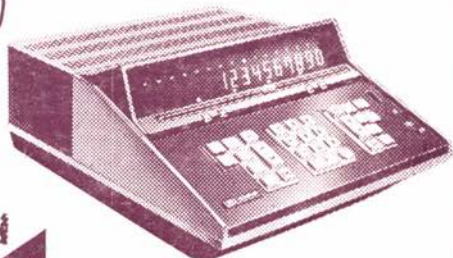
十二月号

タッチでえらべば
やっぱりサコム



サンヨー電子式計算機

サコム
SACOM



見やすい設計 ICC-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレス・√%キー付き
16ケタ2メモリー高級品

SANYO 三洋電機株式会社

定価 三百円（消費税六円）